
奈良仏教の地方的展開の研究

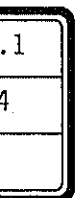
(課題番号 11610336)

平成11年度～平成12年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書

平成13年3月

研究代表者 根本誠二

(筑波大学歴史・人類学系助教授)



182.1
1164
A10

はしがき

平成11年から12年の2年間に及ぶ文部科学省科学研究費（基盤研究C）の交付を受けて「奈良仏教の地方的展開の研究」は、二つの目標を掲げて行われた。第1には、奈良仏教のこれまでの研究が、中央の官大寺とそれを支えた仏教者、すなわち官僧を中心になされてきた事への反省である。このために奈良仏教の信仰史的な意義は、未だ解明されていない。これを解明する手がかりを得るために、本研究では、奈良仏教がいかにして地方へ展開（浸透）していったか、ないしは奈良時代の人々がいかにして奈良仏教を受容したかに注目した。当然、地方の人々の神仏習合についての信仰的な独自性に着目せざるを得ないことはいうまでもない。第2には、これまでの奈良仏教の研究の素材が、とかく文献中心であったことに対して、多面的な解析を実現するためにすこしでも多岐に及ぶ史資料を収集・検討することである。

第1については、本来的には日本全国に研究の視野を展開すべきであるが、今回はこれまでの奈良仏教者に関する伝承・縁起研究や古代の地方寺院の研究をふまえて、次の地域を選定した。岩手県北上地方・福島県会津地方・滋賀県湖北地方、そして、佐賀県の佐賀市・川副町を中心とした地域である。これらの地域には、奈良仏教者に関する伝承・縁起史料にのみならず、彼らが自刻したと伝える十一面観音像や薬師如来像等が伝存し、特定の仏教者と観音信仰や薬師信仰との関わりが想定できる。いわば奈良仏教者は、こうした仏教固有の諸信仰を介在させて奈良時代の地方の人々へ仏教の信仰を浸透させていったとの仮説を設定した。この仮説を裏付けるものが、仏像をはじめとする仏教美術作品である。こうした点、即ち第2の点について啓発して頂いたのが、1995年以来、湖北地方や会津地方で共同調査を実施してきたアーモスト大学美術学部教授のサムエル C・モース氏であった。私は、改めて北上地方・会津地方さらには湖北地方での仏像の所在調査を実施してみた。それらの地方では、古代以来の仏像（古代仏）を信仰に裏打ちされながら伝存させてきた人々の「目線」を感じた。この「目線」をもって奈良時代の地方の人々の仏像への「目線」を読みとるのは、荒唐無稽のそしりを免れないであろう。しかし、こうした「目線」を勘案しつつ文献史料や仏像をはじめとする仏教美術作品の解析を積み重ねることによって、奈良仏教の信仰史的な意義を解明できると確信している。その意味でも、本報告書をその第一歩としたい。

なお、本研究は、筑波大学の同僚や学生をはじめ、実に多くの方々のご教示とご協力とによって進捗させることができた。なかでもボストン美術館のアン・ニシムラ・モース氏、岩手県立博物館の大矢邦宣氏、北上市立博物館の本堂寿一氏、皇學館大学の宮城洋一郎氏からは、懇切なご教示を賜った。記して御礼を申し上げる。さらに、史料及び写真の掲載をご快諾頂いた佐賀県川副町正定寺の田原正英氏、同町東光寺の田中六次氏・松林 勇氏にも心から御礼を申し上げたい。

平成13年3月15日

根本 誠二

研究組織

研究代表者 根本誠二（筑波大学歴史・人類学系助教授）

調査協力者 秋吉正博 木村 衡 佐藤英雄 杉山美律 瀬部牧恵
長谷部将司

研究経費

平成11年度 1,800千円

平成12年度 700千円

合 計 2,500千円

研究発表

(1) 口頭発表

根本誠二 「相模の古代寺院と仏教者」

（相模原市立博物館考古学講演会、平成12年3月18日）

(2) 会誌・出版物等

根本誠二（他、共編著）『日本宗教史研究文献目録』2

（岩田書院・平成12年2月）

根本誠二 『説話の森の仏教者』

（そうよう・平成12年7月）

I、行基と薬師信仰

根本誠二

はじめに

奈良仏教は、皮肉にも天平十五（743）年の大仏の造立の詔を機として、一時的にせよ「国家（天皇・貴族）」だけではなく、民衆にも開かれた存在となった。そして、これを機として奈良仏教は、国家や民衆という範疇を超えた、いわば官僧の仏教と私度僧の仏教との境界が不鮮明なものとなった。さらには僧俗の人々が一体となって、いわば僧俗混淆となって仏教信仰の質を互いに問いただす場を共有し、奈良仏教が宮廷や官大寺にとどまらず、広く人々や地方に拡散するという「自度の仏教」の形成がなされようとした。その契機をもたらしたのが、天平年間の行基であった。

行基がどのように多くの人々に仏教を布教したかを知る手がかりを強いてあげるならば、平安時代のはじめに編纂された日本で最初の仏教説話集である『日本霊異記』（以下、単に『霊異記』とする）がある。『霊異記』には、作者景戒をして人々に「霊異神験」を説くに足る、ないしは印象づけるに足る宗教者として、行基が最も数多く登場する。

行基に関わる説話は、因果（原因と結果）の究明のもとに、解決策、それは時として具体的な修行方法や信仰活動のあり方を提示していった。さらにはその解決策である呪術の背後にある信仰的な世界にまで人々を誘い、人々をして信仰的な諸々の活動に参加させる能力（霊異神験）を発揮することができたとしている。加えて、そのモチーフの一つには、多くの諸尊諸仏に関わる説話もあり、行基をはじめとする多くの仏教者の足跡と相俟って、奈良仏教の地方への拡散の様相を描き出している。本稿は、こうした『霊異記』を手がかりとして、行基と薬師信仰との関わりやその系譜につながるであろう肥前七仏薬師を紹介するものである。これらを叙述することによって、薬師信仰を契機として奈良仏教が如何にして階層的にも地域的にも拡散していったかの要因の一端を明らかにしたい。

一、薬師如来への信仰

行基と関係の深い諸尊・諸仏には、例えば観音札所寺院に代表される聖観音・十一面観音等の観音系の諸尊がある。それにつぐのが薬師如来である。行基と薬師如来との関係を想定させる要因は、母の出自が「蜂田薬師古」（「行基菩薩伝」）であったことから医療に通じていたであろうとの伝承があり、これが薬師如来と行基を結びつける所以である。こうしたことからか、行基が全国の寺院に薬師如来を安置したという縁起が伝存している。例えば、東京都大田区西六郷に所在している安養寺（真言宗智山派）の正徳五（1715）年五月の「安養寺薬師如来縁起」（『大田区史』社寺編1）によると、

武州荏原郡六郷領古川村医王山安養寺薬師如来縁起

抑当寺草創ハ行基菩薩関東来化被成しとき開起し所なり然るに此所に入江有西は広々たる芝野南ハ大河の流清浄の地なるがゆへに和銅三庚戌年に座像御長五尺五寸の薬師如来両脇弥陀釈迦座像御長五尺三寸並十二神四天王

二王ともに行基菩薩一刀三礼の御作御堂造立被成安置し給ふ靈驗あらたなるがゆえに遠近かくれなく貴賤群集参詣踵をつく其後星霜を経て天平五癸酉年春三月に聖武帝の后王子誕生御座き然に此太子乳房を一度含み給へハ其俣つきぬあまつさへ他の乳味刹那もふくミ給ハす皇后是をなけき給ふ帝おとろかせ給ひ諸寺諸山に御祈有といへとも更にしるしなかりき依之行基菩薩を召て祈願の宣旨有時に行基奏し給ふハ是より東武蔵国荏原郡に薬師如来の尊像まします是に銀杏を植給ハゞ御願立所に成就と奏し給ひ帝叡聞在て早速船を造らせ銀杏をともへに植させ船を海上にうかめ給ふ皇后その夜の御夢にたつとき老僧現給ひ瑠璃の御手にて乳房を撫給ふと見給ひて夢覚ぬそれより乳味満足し給ひ太子延命の奇瑞と御感ななめならず然る所に彼銀杏薬師の仏前なる入江に着船す土民是をおとろき見れハ其木の下に薬師如来奉納と尺牘に是をしるす見る人不思議弥ましぬ其夜に船は水中にしつミ銀杏ハ仏前にならふ此所入江なるがゆえに其後古川村と名付たり時に天平五癸酉年初秋帝行基を召て朕が願望如意満足せり依御堂造立の宣旨在て七堂伽藍の靈地と成也

古来之縁起破裂今新書写畢

(中略)

正徳五乙未曆五月 日

とあり、薬師如来が聖武天皇の皇后光明子の子育てに靈驗があったことをしるしている。これを現在に至るまで伝えているのが、安養寺の本堂の前の二株の銀杏の大木である。これに子育ての最中の女性が祈願すると母乳が出るとの信仰がある。その大木の傍らには元禄三（1690）年九月に安養寺住職栄弁によって造立された「銀杏折取禁制碑」（大田区文化財）があり、信仰のためとはいえ、木の一部をはぎとることのないようにとあり、その信仰のよすがを知ることができる。この縁起と比較的に類似しているものをもつ寺院として、「本木薬師」と通称されている東京都豊島区小石川の光円寺（浄土宗）や安養寺と多摩川を挟んで対岸に所在している神奈川県川崎市高津区野川の影向寺（天台宗）がある。宝永七（1710）年の「影向寺縁起」（『神奈川県史』資料編8）によると、

靈石のうへに有ける小池の水を一度服する人は、寿命長遠にていかなる病も癒いよずということなく、眼を患うともから、目をあらひぬれハ、忽に本復す。

とあり、諸病・眼病にきく水にまつわる信仰を説いている。靈石は、「影向石」として境内の一角に現存している。ちなみに、薬師如来が眼病に効ありとするのは、すでに『靈異記』にもうかがえる。例えば、下巻第十一縁には

諾樂の京の越田の池の南の蓼原の里の中の蓼原堂に、薬師如来の木像在り。帝姫阿倍の天皇のみ代に当たりて、其の村に二つの目ながら盲ひたる女有りき。此れが生める一の女子、年は七歳なりき。寡にして夫無し。極めて窮れること比無し。食を索むること得ずして、飢ゑて死なむとす。自ら謂へらく、「宿業の招く所ならむ。唯に現報のみには非じ。徒に空しく飢ゑて死なむよりは、善を行ひ念ぜむには如かじ」とおもふ。子をして手を控かしめて、其の堂に迄り、薬師仏の像に向ひて、眼を願ひて曰さく、「我が命一つを惜むに非ず。我が子の命を惜むなり。一旦に二人の命を已へむ。願はくは我に眼を賜へ」とまうす。檀越見矜ミテ、戸を開きて裏に入れ、像の面に向

かひて、以て称礼せしむ。逕ること二日にして、副へる子の見れば、其の像の臆より、桃の脂の如き物、忽然に出で垂る。子、母に告げ知らず。母、聞きて食はむと欲ふが故に、子に告げて曰く、「搏りて吾が口に含めよ」といふ。之を食へば甚だ甜シ。便ち二つの目開きぬ。定めて知る。心を至して発願すれば、願として得ずといふこと無きことを。是れ奇異しき事なり。

とあり、「二つの目盲たる女人」が、大和国添上郡にある^{よではらどう}蓼原堂の薬師如来像に向かつて眼が開くようにと祈願したとの説話がある。これによると、女性が祈願すること二日の後に、その像の胸から桃の脂のようなものが出た。これを口に含んだところ、彼女の目はたちどころに開いたというのである。桃の脂は母乳にも相当し、万病に効ありと言われている。薬師如来の利益を庶民がどのように受け止めていたのかの一端を物語る事例と言えよう。そして、こうした説話の延長線上に位置するのが、例えば、東京都あきる野市引田にある「引田薬師」（真照寺・高野山真言宗）のように、各地の薬師堂に「め」の字の眼病平癒の祈願絵馬を奉納するという事になったのである。

さらに薬師如来像は、庶民生活のふとした場面に登場するという。例えば、『靈異記』中巻第三十九には、

駿河の国と遠江の国との堺に、河有り。名を大井川と曰ふ。其の河の上に鵜田の里有り。是れ遠江の国の榛原の郡の部内なり。奈良の宮に天の下治めたまひし大炊の天皇の御世、天平宝字二年戊戌の春三月に、彼の鵜田の里の河の遍の砂の中に、音有りて曰く「我を取れ、我を取れ」といふ。時に僧有り。国を経て彼を行き過ぐるに、当の時、我を取れと曰ふ音、猶止ま不。僧呼び求むるに、邂逅に聞くこと得たり。沙の底に音有り。埋もれたる死人の蘇め還りたるなりと思ひて・(堀)りて見れば、薬師仏の木像有り、高さ六尺五寸、左右の耳缺けたり。敬礼して哭きて言はく、「我が大師や。何の過失有りて、是の水難に遇ひたまふ。縁有りて偶に値へり。願はくは我修理したてまつらむ」といふ。知識を引率し、仏師を勧請して、仏の耳を造ら令め、鵜田の里に堂を造りて、尊像を居きて供す。今号けて鵜田堂と曰ふ。是の仏像、験有りて光放ち、願ふ所能く與ふるが故に、道俗帰敬す。伝へ聞く、優填の檀像、起ちて礼敬を致し、丁蘭が木母、動きて生ける形を示すといふは、其れ斯れを謂ふなり。

とある。一人の旅の僧（これは行基をイメージさせる）が、大井川の洪水で流され、耳を破損してしまった薬師如来像を発見した。発見したことも何かの縁であろうと鵜田の人々に修理事業への結縁を呼びかけた。その結果、知識結をもって修理を行うこととなり、さらには鵜田堂と称する堂宇も建立することができた。この薬師如来像の発見を機に人々に仏教への尊崇をうながすこととなったのである。薬師如来像は文字通り人々の身近にあって、その利益の確かさを確信させたという説話である。民衆レベルでの薬師信仰の様相を物語る一例である。知識結の成立は、薬師信仰への認識が人々の間に存在して証左いえよう。

二、行基と七仏薬師

本来、薬師如来をどのように信仰すべきかについて、その一端を玄^{げんじょう}奘訳の「薬師瑠璃光如来本願功德経」（原漢文、『大正新脩大藏経』第14巻407頁下段。以下、単に『大

正蔵』とし、巻数・頁数のみ表記)をみると、

復次に、阿難、若し刹帝利、灌頂王等に災難の起る時あらん。所謂人衆疾疫難・他国侵逼難・自界叛逆難・星宿變怪難・日月薄蝕難・非時風雨難・過時不雨難なり。彼の刹帝利・灌頂王等、爾の時、応に一切の有情に於て慈悲心を起し、諸の繫閉を赦し、前に説きし所の供養の法に依りて、彼の世尊薬師如来を供養したてまつるべし。此の善根及び彼の如来の本願力に由るが故に、其の国界、即ち安穩なることを得令しめん。風雨時に順い、穀稼成熟し、一切の有情、病無く歡樂せん。其の国の中に於て、暴虐の菓叉等の神の、有情を悩ます者有ること無く、一切の悪相、皆即ち穩没して、刹帝利、灌頂王等寿命・色力・無病自在に皆増益を得ん。阿難、若し帝后・妃主・儲君・王子・大臣・輔相・中宮采女・百官・黎庶、病の為に苦令められ、及び余の厄難あらんにも亦、応に五色の神幡を造立し、燈を燃して明を続け、諸の生命を放ち、雑色の華を散じ、衆の名号を焼くべし。病、除愈することを得、衆難も解脱せんと。

とあり、為政者への諸々の災難を除去するに功験が有るとしている。これを受けるかのよ
うに、『続日本紀』にも度々、薬師如来へ祈願を行い天皇の病状の恢復を願う事例が散見
できる。例えば、天平勝宝三(751)年冬十月壬申条みると、

師信仰の主流になっていったのであろうか。ついで『続紀』天平勝宝(七五一)三年冬十
月壬申条みると、

詔して曰く、頃者、太上天皇枕席穩らず。是に由りて七ケ日間、四十九の賢僧を新薬
師寺屈請して、続命之法に依りて、設齋行道す。仰ぎ願くは、聖体平復し、宝寿長久な
らんことを。経に云く、雑類衆生の受苦を救済せば、各々病を免れて年を延ぶと。是を
以て、依教に依りて、天下に大赦す。但、犯八虐・故殺人・私鑄錢・強竊二盜、常赦所
不免さざる者は、赦の限りに在らず。

とあり、太上天皇、即ち聖武太上天皇の病気の回復を願って、前述の薬師経を所依として、
「続命」の法を七日間に涉って行い、さらにその功験がより顕著となるように諸種の生き
物を放ち(放生)し、さらには重罪人を除外した恩赦を実施するなどの善行を積んで、尚、
一層の功験を期待している。これは、まさに薬師経の趣旨にそって諸々の信仰的な「あか
し」を積み上げて、結果的に太上天皇の病氣平癒を成就し、それを以て国家安穩をもたら
そうというものである。いわば、薬師如来への祈願が、国家的な目的に基づいて行われた
典型例とすることができよう。こうした事例は、天平勝宝年間に始まったことではなく、
天武天皇の時代における薬師寺の建立に遡ることはいうまでもない。いわゆる薬師信仰が、
国家的なレベルを中心に受容享受されてきた状況を物語る。さらに玄奘訳の「薬師瑠璃
光如来本願功德経」にみる薬師十二大願のうち第七願(原漢文、『大正蔵』14-405
上~中)によれば、

願わくは、我れ来世に菩提を得ん時、若し諸の有情、衆病逼切にして救無く、帰す
るところ無く、親無く、貧苦多苦ならんも、我が名号一たび其の耳に経れば、衆病
悉く除くことを得て身心安樂に、家属資具悉く皆豊かに足り、乃至無上菩提を証得
せん。

とある。薬師如来の名を称えれば、「諸の有情」、即ち多くの人々の諸病にことさら靈験
ありとしている。前述のように薬師信仰が国家的なレベルでの信仰であったのに対して、
ここでは、病氣平癒に功德がありとして、ありとあらゆる病氣や多くの人々の病氣を治す

のに「力」があるとする。しいて言及するならば、民衆レベルでの信仰としての薬師信仰のあり方であった言ってもよい。つまり、本来的には薬師信仰は国家レベルと民衆レベルの二面性を保持しているということである。

薬師如来像は、本来は、一尊像を以て礼拝の対象とされてきたが、唐義浄の訳になる「薬師瑠璃光七仏本願功德経」が受容されて、七尊形式（七仏薬師）や十二神将を伴う形式を以て礼拝されることとなる。例えば七尊形式（原漢文、『大正蔵』14-414中～5下）については、

若し病人及び余の災厄有りて、脱しせめんと欲さば、当に其の人ために七日七夜、八戒齋を持すべし。応に飲食及び余の資具を以て、其の所有の隨に仏及び僧に供し、昼夜六時七如仏来恭敬礼拝し、此の経を四十九遍誦誦し、然りて四十九燈を造り、彼の如来形像七軀の一一の像前に各の七燈を置かむ。其の七燈の状、円にして車輪のごとし、乃至は、四十九夜光明のごとくして、絶えず、綵幡四十九首を造り、并せて一長幡四十九尺を造り、四十九生を放たむ。是の如くせば即ち、能く災厄難を離ち、諸横の悪鬼を所持することをせず。とあり、薬師如来を持戒清浄のうえ七仏造像し、諸々の災難を除去しようとの信仰があったことがわかる。薬師如来の功德を引き出す際に、単に「恭敬礼拝」だけでなく、其の前提として「七日七夜、八戒齋」の受持が求められていたことは注意すべきである。

七体の薬師如来像はここでは、一カ所に安置し、七仏像の一体一体に灯明と供物を供え、読経供養すべしとある。この事例は、近畿地方で例としては、滋賀県木之本町の己高閣があり、関東地方での例としては、千葉県印旛村の松虫寺（真言宗豊山派）にある。松虫寺には、像高五十センチ程度の主尊を中心に七体の薬師像が伝存し、聖武天皇の娘松虫姫の病を行基が治したとの伝承がある。

ちなみに七仏薬師如来には、一尊に六体の化仏を交えて尊像としている場合もある。しかし、行基作の六阿弥陀や七観音のように、七体の薬師如来像を七カ所に点在させて信仰する事例はあるのであろうか。行基作ではないが、丹後地方には七体の薬師像を七カ寺に分置して信仰する事例がある。京都府の丹後地方に点在する、加悦荘施薬寺・河守荘清園寺・竹野郡元興寺・同郡神宮寺・溝谷荘等楽寺・宿野荘成願寺・白久荘多祢寺である。これらの薬師如来像は、八・九世紀の日本社会に広く信じられていた七仏薬師経に起源し、その配置のされかたは両丹地方における交通の要所や境界に分置して、「さえ」の神的な役目を果たしていたと考えることができるであろうとする指摘は興味深い。

こうした行基作の薬師如来像のうち七仏薬師に関わる事例が、表に掲載した佐賀県佐賀市と佐賀郡川副町一帯に点在する「肥前川副七薬師」（以下、「七薬師」とする）である。「七薬師」は、東光寺（臨済宗東福寺派・佐賀県佐賀郡諸富町）をはじめとして、佐賀市・川副町・諸富町に点在している。宗派は、臨済宗東福寺派だけではなく、浄土宗・曹洞宗となっている。そのうちの正定寺（浄土宗・佐賀郡川副町大字南里）の宝永三（1706）年の由緒書（別掲）をみると、天平年間に九州各地で水害がおこり疫病が流行した。その被害は各地に蔓延し、作物への被害のみならず多くの人々が飢えや疫病で死んだ。天平年間の疫病といえ、天平八年に九州から蔓延した天然痘を想起させる。このとき温泉山（雲仙であろうか）に投宿していた行基に人々が救いを求めた。これを哀れんだ行基は早速にも、米野津村に赴いた。そこで一本の「樟樹、時ニ放光者。基遙識靈木」を得て、薬師如来像を七体を彫刻し、河副の七カ所に安置したというのである。その七体の薬師如

来に七日間にわたって祈ったところ「飢饉疾疫は立地（たちどころ）に止み」、作物も豊に実った。これを機に、人々は行基を「活仏」と仰いだという。そして、時の聖武天皇は七仏像を安置した場所を寺院とし所領を寄進したという。これが肥前七仏薬師のはじまりであるという。同様の所伝は、「中川副村崎江薬師如来縁起」（『東川副村村誌』前篇所収・別掲）にもある。そこでは、「初め崎ヶ江村にて三軀を造りて徳富村・寺井崎箇江之三ヶ村に安し、後米納津村に移り四軀を作り米納津・南里・新郷・袋の四所に安し給ひ一七日之間国家安全厄難消除之精誠を凝し給ひしかば、疫病飢饉忽ち止みにけり。」とあって、前述の正定寺の由緒書より多少詳しく、どのような地に薬師如来像が安置されたかが記されている。

これらの記述によるならば、温泉山に投宿していた行基が川副（後の川副荘に相当する地域。川副荘は、佐賀市北川副町から川副町に広がり、有明海の干拓によって陸地となったもの。その所見は大治五（1130）年であり、最勝寺領肥前河副荘とみえる。その後、鎌倉期に至って佐賀郡大和町春日に所在する臨濟宗東福寺派の肥前国での拠点であった高城寺が、北条時頼ら一門の菩提を弔うという事で、川副荘の三分の一を施入されたことにより、有明干潟の開発にあたったという。）の人々の懇請を受けて、米野津なり崎ヶ江なりの有明海の沿岸に上陸し、流れ着いた霊木をもって七体の薬師如来像を作成し諸所に安置したとのモチーフとなっ



（薬師如来立像、佐賀県川副町東光寺蔵）

ている。他に流木により数体の仏像を作製したとする縁起としては、佐賀県に隣接する長崎県に所在する「肥前七観音」がある。ともに有明海に面しており諸仏の分布に何らかの

関連性が想定できる。その想定の一つに温泉山の存在があると思う。

なお、米野津の東光寺では昭和30年代の前半まで、立像（素材は楠であるという）の薬師如来像の前で毎月8日に近隣の女性たちによって薬師講が開かれていたという。南里の正定寺でも毎月12日に座像の薬師如来像の厨子の扉を開き、ことに正月・5月・9月には祈願法要を行っているという。そして、正月12日には、周辺に点在する七仏薬師を巡拝している。

表 肥前川副七薬師

	寺名	宗派名	所在地	備考
1	東光寺	臨済宗 東福寺派	佐賀県佐賀郡諸富町大字徳富	
2	長福寺		佐賀県佐賀郡諸富町大字寺井津	
3	法源寺	浄土宗	佐賀県佐賀郡川副町大字福富字崎ヶ江	座像
4	東光寺	臨済宗 東福寺派	佐賀県佐賀郡川副町大字福富字米納津	立像
5	正定寺	浄土宗	佐賀県佐賀郡川副町大字南里字西南里	座像
6	本願寺	曹洞宗	佐賀県佐賀市北川副町大字新郷	
7	寒若寺	曹洞宗	佐賀県佐賀市本庄町大字袋	
	安竜寺	真言宗 御室派	佐賀県佐賀郡諸富町大字為重字為重	七仏薬師 造像地

三、行基と温泉薬師

行基が温泉の湧き出る場所の付近に薬師如来を安置し堂宇を建立したとする縁起は、兵庫県神戸市の有馬温泉を筆頭に、石川県の山中温泉・山代温泉、静岡県田方郡の吉奈温泉をはじめとする全国の温泉に伝えられている。いわゆる「温泉薬師」と称するものである。そして、宮城県さくぬまの作並温泉・福島県の会津東山温泉・群馬県草津町の草津温泉・愛知県蒲郡の三谷温泉・京都府の木津温泉・長崎県雲仙の小浜温泉にも行基開湯伝説がある。例えば、石川県江沼郡山中町の医王寺（高野山真言宗）には「山中温泉縁起絵巻」が伝えられている。この縁起は、奥書おくがきによると寛政十（1798）年に焼失してしまったので、医王

寺良応が文化八（1811）年に再製したものとある。同様のものに、『石川県江沼郡誌』には「三州奇談」所引の建久五（1194）年の古縁起「加州山中村湯縁起」がある。

石川県加賀市山代町にある山代温泉も同様に行基が開湯したとの伝承がある。さらに、同町には行基が創建したと伝える薬王院（真言宗智山派）があり、山中町の医王寺と同様に「靈宝山薬王院略縁起」並びに宝永三（1706）年の「山代温泉並薬王寺記」が伝存している。こうした僧侶による温泉の開削に関わる伝承には、人々への布教の一環として温泉への入浴、即ち湯施行ゆせきぎょうに関わる記述がみえる。文字通り病氣治しとして薬師如来の功德に関わるものである。

なお、温泉と行基との関係は寺院のみに限定できない。例えば宮城県仙台市青葉区にある作並温泉には、行基と関係を物語る史料として、温泉街の一角に位置する湯神社の境内に「宮城郡作並邑温泉地坪之碑」がある。これは、文政三（1820）年に修築されたもので、銘文を読むと、行基が養老年間（717～24）に掘り当てた温泉を、建久年間（1190～99）になってから、鎌倉幕府の征夷大將軍源頼朝が奥州征伐の時に当地を訪れ、狩りをした際に、討った鷲が温泉に傷を癒しているのを見て、かつて行基が掘り当てた温泉の旧跡を知りえたという。行基が発見した温泉を後の時代に源頼朝等の武將が再発見したというモチーフは多々ある。前述の山中温泉の場合も源頼朝に組した在地の長谷部信連が再発見したものであるとしている。また、「宮城郡作並邑温泉地坪之碑」にもあるが、群馬県の草津温泉も奥州への途中に行基が掘り当てたとの伝承があり、草津温泉と作並温泉が何らかの関係がある事を示唆している。

草津温泉には、建久四（1193）年に源頼朝が那須野・三原野での狩りの時に発見したとの伝承がある。例えば、草津町草津に所在する光泉寺（真言宗豊山派）の縁起には二種類ある（ともに『草津温泉史料』第1巻所収、昭和51年刊行）。一書は、『温泉由来記』に所載されている正治二（1200）年の「上野国吾妻郡草津温泉由来」で、これによると温泉開湯については、頼朝が温泉を発見して、後世に「薬師観音不動尊」を安置したのが光泉寺のはじまりであるという。もう一書は、『温泉奇功記』に所載されている「草津温泉由来記」である。これによると、草津温泉の「来由奇功」には、三説あるうちの一説に、

行基菩薩此所を経歴し給ふに、群嶺嵯峨として咸く鐘秀の気を帯り、中に就て此所ひとり温潤として唯に仁恵を含み、温泉蹙沸せんことを思ひ、暫く錫をとどめて加持護念し給ふに、奇なるかな暖煙空に簾々として忽ち温泉沸く。

とあり、その後の経緯は、「上野国吾妻郡草津温泉由来」と同様である。「宮城郡作並邑温泉地坪之碑」の記述の源に関わるものであろうか。いずれにせよこれらの記述は、兵庫県の有馬温泉を代表とする温泉の創建に関わる「温泉薬師」の信仰の伝播を解き明かす契機になる。有馬温泉の開湯伝説は、『伏見宮家旧蔵所持縁起集』（図書寮叢刊所収、昭和45年）に所載されている「温泉山住僧薬能記」の一節によれば、

昔、行基菩薩、有馬温泉に向かう間、武庫郡内に一病者あり。山中に臥す。行基、問ひて云く、汝何の患方にてかくの如くなるや。病者、答へて云く、病痾を療せむが為に温泉に赴かむと欲す。筋力尪羸して達し難し、飲食既に絶へて漸く数日に及ぶ。願くは聖人、忝くも恵慈を施し、助我身命を助けむ。是において行基、糧を与へ病を止める病者云く、自ら鮮魚にあらざれば、食を以てすること能わず。茲に因りて、行基、長州浜に至りて、

魚肉を求め得て、令予病者に与へしむ。病者、云く、其の味を調へるに、其膳に宛てる。仍りて塩梅を和し病者に勧めむと欲す。聖人、先ず其の氣味を調べ、魚肉を食し、以て行基、嘗て之を試して美める。予赴食之。宜補病者飢乍臥地上食于懷中。病者、又云く、身に瘡を煩ひ湯之功験を求む。汝、実に聖人為らば、我膚を舐めて扶けむ。此の病、其の躰を如焼くが如く爛れり。其の香、多く臭ひ穢れりと云ふ。然れども慈悲至深にして相ひ忍びて舐れば、其の崩れたる膚、紫磨金色なり。其の形貌を望めば、また薬師如来なり。其の時仏告げて曰く、我は是れ、温泉の之行者なり。聖人の慈愛を試さむが為に、仮に病者の形躰に現じて。言ひ記(訖)かりて去りぬ。忽然として跡なし。行者(基カ)、当時成誓願をなし堂舎を建立し、薬師を安ず、必ず勝地を示し、其跡を崇めむ。温泉山住僧薬能、往事を伝聞すること、大概を粗記する。

弘仁十年 八月七日

とある。この縁起の先行形態としては、『古今著聞集』巻第二所収の「行基菩薩毘陽寺を建立の事」にあるということは周知のとおりであるが、全国的に展開する温泉薬師の原型をなすものであるという指摘がある。前述の「温泉山」もこの系譜に属するものであろう。いわば温泉を契機とする湯施行という病氣治療の功德に関する説話を薬師如来への信仰に仮託することによって、人々の仏道修行への契機をもたらしたというのである。いわば民衆レベルでの薬師信仰の様相を物語っている。

おわりに

日本における薬師信仰は、本来的には諸訳の「薬師経」にも見出されるように為政者の病氣平癒や国難に利益がありとされ、国家的なレベルでの受容によって信仰が高まりを見せたという指摘がある。いわば為政者のための信仰であったとの色彩が濃かった。天武朝における薬師寺の創建にはじまり、『続紀』に見る薬師悔過をめぐる事例を考えるとあながち無視し得ない指摘である。しかし、たとえ伝承の世界とはいえ、行基との関わりで薬師信仰をひもとくと、必ずしも為政者のみがそれを享受していたとは言い切れない。ないしは、行基が解き明かそうとした薬師信仰は、必ずしも、国家との関わりの中だけで喧伝されたものではなかったようだ。例えば、『靈異記』にみる薬師如来像への信仰譚や七仏薬師、さらには温泉薬師が、すべて行基に歴史的にも信仰的にも結節させて考察するのは早計のそしりを免れないが、人々がそれを享受していたという縁起や伝承が見いだせるということは、行基は本来的には、国家的要請に応えていた薬師信仰を民衆のもとに引き吊りおろしたといえないであろうか。ないしは行基は、薬師信仰が持っている眼病をはじめとする諸々の病氣治しに功德があるとする効能を全面に押したてることによって、人々の仏法への期待に応えていったのではないか。ここに、薬師信仰が、国家的な信仰から民衆救済の信仰に転化していった契機を想定したい。そして、行基が自家薬籠中の信仰で国家的なレベルの信仰であった薬師信仰を民衆に開放してしまったことも律令政府から指弾を受ける原因となったといえないであろうか。はたまた、これを機としてその後の薬師信仰は行基と結節することによって、国家的なレベルだけではなく民衆レベルにもともに対応しうる信仰として喧伝されることとなった。その端末に位置する一例が、「川副薬師如来」の事例なのではないかと思う。

こうした経緯を経たであろう薬師信仰の変容を説き明かす事例を蓄積していくことによって、行基が薬師信仰を契機として人々との信仰的な交歓を果たした契機や、奈良仏教が階層的に広がり見せることとなった背景も解明できるものと確信している。

参考文献

石田瑞麿『民衆経典』（仏教聖典選12、筑摩書房、昭和62年）。

中野玄三「八、九世紀の七仏薬師像－丹波・丹後地方の諸像を参照して－」（『仏教芸術』59、昭和40年12月）。

西尾正仁『薬師信仰』（岩田書院、平成12年）

松本裕美「薬師信仰の日本伝来について」（『棚木史学』5、平成3年3月）。

中沢温泉研究所編『温泉草津史料』第1巻（中沢温泉研究所、昭和50年）

{別掲史料}

1、「正定寺由緒録」（正定寺蔵）

肥前国佐嘉郡河副莊南里村医王
山不退院正定教寺伝録

薬師出現

当寺薬師河副七仏第五鎮護国家尊像也。考其権輿人王第四十五代聖武帝御宇天平年中九州諸国疫疾大流行不日死者不知其幾千万人。且大旱洪水之變累年五穀不登餓死道路者不可勝計焉。悲聲連村里、臭骸滿江流国家驚歎人民恐怖取譬無物。時行基僧正挂錫於温泉山、河副諸人急走乞法救於基師。基深愍之涉海來米納津村（村有一小林。俗呼行基屋鋪）。偶得一樟樹、時ニ放光者。基遙識靈木、即彫刻薬師像七軀、安之河副七処以念誦一七日。飢饉疾疫立地止。人皆還天年豐歲、諸方老弱扞躍瞻基猶活仏。基以事奏聖武帝帝叡感特甚勅創建堂宇於七処、寄莊田若干。且賜永為勅願所、可奉祈宝祚延長一天泰平之綸旨。尔來靈威山高、妙応谷響、無貴無賤七処巡拝者永繼踵矣。

弘安八年三月北条前遠州

〈法名詣阿・・平時定見高城寺年譜〉寄
仏食田五段、祈二世所願寄附之状
今存〈五段今纔一段存四段失而無〉。
天文至天正之間、少貳家龍造寺家
建修堂宇、祈国家安全。至近世棟札
在焉。今失亡無之。

天正之末 太守直茂公隨古例免
除堂地三段田一段。時鍋嶋生三與
国政事。

寛永二十年四月 太守勝茂公、革
古堂、造新宇祈国家昇平。慶讚導師
十八世忘譽、棟札今存。

此堂、至近年大破壊、終傾倒而今
亡無焉。安尊像本堂傍。再建因縁熟
幾日乎吁。

尊像出現天平四五年之間、至今
宝永三年凡得九百七十四年。

或説基師、初在崎箇江村造三軀、
安之徳富寺并崎箇江。後移米納
津村造四軀、安之米納津南里新
郷袋。今記稍違未知孰是。

或説基師、曾得靈栴於筑後誓曰、
応到有縁地必彫仏像。已而投海、
甫来此地、聞有一物漂着崎箇江
村南浜而時二放光者。到見便此
樹也。基大喜、以一株彫七軀矣。今
録得一樟樹未知得何処。引或説
援之。

或問基師彫像七軀有由乎。曰世
流布本願經等無七仏名。按義浄
三藏所訳之經、有七仏名。所謂善
名称吉祥王如来、宝月智嚴光音
自在王如来、金色宝光妙行成就
如来、無憂最勝吉祥王如来、法雷
音如来、勝慧遊戲神通如来、藥師
瑠璃光如来、是異名同體之仏也。

基師之七軀或本茲乎。

開山祖師

釈願海字満恵號宝蓮社未詳氏族
本貫。人王八十四代順徳院御宇建

十六塔当山。

宝永三年春当国 刺史命侍臣
石田実松両氏、輯録国中寺社有
来由者。以両氏問当寺事实欲答
之。旧記尽亡纔殘者蠹簡殘篇而
不可考焉。然以不可黙、校合之鬼
簿口碑及処々芟不正摘正以録
焉。下一字書者、蓋所以別本録與
私料簡也。偶有客、寒暄相訖、話及
此事。予以録示之。客一見笑曰、子
文章鄙俗而不漢不倭区誑叵通。
予是客語而加倭点、使人易誑。之
以答両氏机下云。

龍集丙戌三月日

医阜正定第二十六世現住

応蓮社宗譽勝願謹識焉

2、「中川副村崎江薬師如来縁起」(『東川副村村誌』前篇所収、昭和14年)

肥前佐賀郡川副莊崎箇江村医王山法源寺薬師如来縁起

当寺薬師如来は河副七仏第三、行基菩薩の彫刻にして守護国家の尊像也。抑々其縁起を委しく尋ぬるに人皇四十五代聖武皇帝之御宇天平年中の事なるに九州の諸国疫癘流行して不日に死する者其の数を知れぬ。又年々続たる飢饉にて餓莩野に充ち満てり。上下万民恐怖せぬと云ふ者無依之処々神社・仏閣に於て大法秘法を執り行ひ様々に所願ありといへ共衆生業感なるにや一向其驗無其頃行基菩薩温泉山に在て衆生を化益し玉ふ。其道德穩なかりしかば河副之諸人急ぎ温泉山に到て菩薩の道德以て諸人を救ひたまへと混らに歎きしかば菩薩深く愍み給ひ諸人と共に河副に来給ふ。菩薩曾て九州行脚之時筑後三国にて一本の楠木を獲玉ひ便ち海中に投じ誓て曰く此木流れ止まる所必ず有縁之地として仏像を彫刻して衆生を化度せん。其後年月を経て今に河副に来りしに崎箇江村の南の海浜に夜に光を放つ物有り。人々奇異の思をなし、菩薩に此事を申しければ便ち見給ふに昔日筑後にて海中に投し給ふ楠木にてありし。菩薩大いに喜び此木を以て薬師像七軀を作り給ふ。初め崎ヶ江村にて三軀を造りて徳富村・寺井崎箇江之三ヶ村に安し、後米納津村に移り四軀を作り米納津・南里・新郷・袋の四所に安し給ひ一七日之間国家安全厄難消除之精誠を凝し給ひしかば、疫病飢饉忽ち止みにけり。自国他国之人民悦び合ひて菩薩を拝せん為につどひ来る事引きもきらさず。菩薩此の事を聖武皇帝に奏し給ひければ、帝叡感斜ならず、勅を下し薬師堂を七処に創し、堂地を免除し、又若干の田地を寄せて尊像之仏供料に供へ給ふ。尔かのみならず永代勅願所として国家安全宝祚延長を祈り奉るべきの綸旨を給ふ。夫れより以来威靈高く聞へ、或は厄難除去を祈り、或は病惱恢復を祈り、或は立身出世を祈り、或は富貴自在を祈り、或は出産平易を祈り、其外種々の願ひをかけ、七所順礼する者其利益を獲ぬと云ふ事なし。誠に是鎮護国家之如来世間希有之靈像なり。薬師出現より宝永元年

迄九百七十余年を歴ると云へり。

II 、 Competing Agendas--Image-Making and Religious Authority In Ninth Century Japan

Samuel C. Morse

Department of Fine Arts
Amherst College

Buddhist sculpture in Japan underwent momentous transformations in the late eighth and early ninth centuries. One of the transformations was primarily technical--wood replaced bronze clay and lacquer as the primary medium of the sculptors's craft. A second transformation was iconographic--images of deities only occasionally represented in the previous century, in particular the Healing Buddha (藥師如来) and Eleven-headed Kannon (十一面觀音菩薩), were produced in unprecedented numbers; and images of new deities, especially those related to Esoteric Buddhism appeared for the first time as well. A third transformation was regional--statues of the period can be found in temples across Japan, frequently in sanctuaries in remote mountain locations or at temples associated with indigenous cults.

Most often cited as the primary catalyst for this change is the decline in the authority of the great Nara temples and the resulting gain in influence of the newly introduced Tendai and Shingon sects. The decline of state support for most temple-building projects, the dissolution of the Official Buddhist Sculpture Workshop at Todai-ji (東大寺) 789 and the subsequent dispersal of the artists employed there is often suggested as hastening the use of wood which was readily available throughout Japan. The appearance of large numbers of proselytizing monks in the tradition of Gyoki (行基 : 668-749), in particular self-ordained prelates such as Mangan (滿願 : act. 760-820), is often proposed as the primary vehicle for the spread of the Buddhist faith. The emphasis within the Shingon and Tendai traditions of establishing temples at sites that resonated with natural forces and the willingness of both sects to accommodate indigenous deities into their pantheon are frequently mentioned as prompting the establishment of Buddhist sanctuaries in remote mountain locations.¹

While each of these explanations contains some veracity, each takes into account only a part of the artistic evidence provided by the statues and the histories of the temples that house them. For example, among the hundreds of extant images produced between the 784, the year that the Heijo capital (平城京) was abandoned and 930, the year of the death of Emperor Daigo (醍醐天皇 : 885-930; r. 897-930), surprisingly only a small number reflect the doctrines promulgated by Kukai (空海 : 774-835), Saicho (最澄 : 767-822) and their followers. These consist primarily of statues at temples directly associated with both monks or at temples founded by their direct disciples--works such as the Nyoirin Kannon at Kanshin-ji (觀心寺) or the Kokuzo Bosatsu at the Kanmyo-in in Otsu.²

Whereas the widespread adoption of wood is certainly a phenomenon of the ninth century, wood was used for Buddhist imagery during the eighth century far more often than is usually assumed. The statues at Daian-ji (大安寺) and Toshodai-ji (唐招提寺) are perhaps the best known of the wooden

images of this period, but there remain other statues at temples some distance from the capital as well such as the standing Eleven-headed Kannon at Tada-dera (多田寺) in Obama, Fukui Prefecture and the standing Eleven-headed Kannon at Enman-ji (円満寺)

in Arita, Wakayama Prefecture.³ And while it is certain that Gyoki was instrumental in spreading the Buddhist faith throughout the home provinces during the first half of the eighth century, such activities were not limited to



monks like him who existed outside of the

(Shōjō-ji:勝常寺 in Aizu)

strictures of the state-controlled

monastic system. This paper argues that it was the religious institutions of Nara that played the primary role in the spread of the Buddhist faith and in the creation of Buddhist images during the first part of the Heian period.

Some of the works of this period that reflect this phenomenon are familiar to all who study Japanese Buddhist art--the seated image of the Healing Buddha from Shōjō-ji (勝常寺) in Aizu, datable to the second half of the ninth century or the standing image of Eleven-headed Kannon at Muro-ji (室生寺) of a comparable date. But the majority are less well known--statues such as the seated image of a Healing Buddha, originally from Hando-ji (now housed at Dainichi-ji : 飯道寺), located deep in the mountains to the south of Lake Biwa; the standing Eleven-headed Kannon from Keisoku-ji (鶏足寺), a mountain-top temple at the border of the provinces of Echizen and Omi, and the standing image presently given the designation of Jizo at Oshima Okutsushima Jinja (大嶋神社・奥津嶋神社) on the south eastern shore of Lake Biwa. It is these lesser-known statues that have frequently escaped academic attention which provide the clues for better understanding this process.

The dominance of the Tendai and Shingon traditions in the religious lives of the Japanese later in the Heian period has meant that analyses of the early history of the Shingon and Tendai sects have tended to obscure the fact that the Sanron and Hosso schools of Nara Buddhism remained vital well into the ninth century and beyond.⁴ Even a scholar with the intellectual reach of the late Kuroda Toshio, has described the ninth century as a period of "unification under Esoteric Buddhism."⁵ For example, frequent mention is made of the Esotericization of the most of the Nara temples, beginning with the establishment of the Shingon-in (真言院) at Todai-ji by Kukai in soon after his appointment as Intendent there in 810. Far less well known is the fact that the Butsumyo-e, one of the most important Buddhist rituals held at the Imperial Place to seek repentance for transgressions of the previous year was

begun in 835 by Joan (静安 : ?-844), a Hosso monk from Gango-ji (元興寺). Similarly, Saicho's close relationship with Emperor Kanmu (桓武天皇 : 737-806; r. 781-805) and Kukai's close relationship with Emperor Saga (嵯峨天皇 : 786-842; r. 809-823) are common knowledge. Less well known is the fact that it was a monk from Gango-ji, Myozen (明詮 : 789-868), who was one of the most powerful religious advisors at the court during the reigns of both Emperor Ninmyo (仁明天皇 : 810-850; r. 833-850) and Emperor Montoku (文德天皇 : 827-857; r. 850-858).

Competition between the Nara schools and the expanding Shingon and Tendai establishments took a number of forms during the ninth century. One was disagreement over doctrinal issues revealed in the debates between Saicho and Tokuitsu (徳一 : 780?-842?) on the classification of Tendai teachings and the nature of Buddhahood.⁶ Another was controversy over institutional authority and independence exemplified by the opposition of the Nara monks to the creation of a separate system of ordination on Mount Hiei (比叡山). A third was the establishment of temples to assert control over a particular region or to challenge the presence of a competing group.

Let me cite two examples. Some time in the 830s or early 840s, Joan, the Hosso monk who had begun the Butsumyo-e, founded two temples, Myoho-ji (妙法寺) and Saisho-ji (最勝寺), on the foothills of Mount Hira (比良山) immediately to the north of Mount Hiei.⁷ Such an act could only have been interpreted by the Tendai establishment as a direct challenge to the authority of Enrayku-ji (延暦寺) which already had a number of affiliated sanctuaries in the region. Later, in 867, Kenshin (賢真), one of Joan's disciples, sought and secured official status for both sanctuaries, evidence that they had expanded their activities to include state-sanctified rituals.⁸ A second of Joan's disciples, Kengo, soon thereafter commissioned twenty-nine sets of paintings of the 13,000 Buddhas (used in the Butsumyo-e) to be distributed to each of the provinces along the Tokai, San'in and Nankai roads for use in rituals for the protection of the state.⁹ The founding of the temples and the distribution of the paintings indicate that this group of Gango-ji monks was actively promoting a Hosso/Nara agenda both along the west shore of Lake Biwa, where the nascent Tendai community was most firmly established, as well as away from the capital.

If the establishment of Myoho-ji and Saisho-ji represented a challenge to the authority of the Tendai sect, Saicho offered a direct challenge to the economic authority of the Nara temples by founding temples along the southern edge of Lake Biwa. Both Roben (良弁 : 689-773) and his teacher Gien (義淵 : d.728) have been associated with many of the oldest temples in this region, from Ishiyama-dera (石山寺) along the Seta River, to Ryosen-ji (靈仙寺) in the mountains where Shiga, Gifu and Mie Prefectures converge. In particular Roben is said to have founded the majority of the Heian period temples in the Koka district which straddles the Yasu River from Lake Biwa south to the border with Mie. Of these perhaps the best known is Koka-dera (甲賀寺) which was located next to the Shigaraki Palace (紫香樂宮), the site where the Great Buddha (大仏) project was first begun in 743. The timber of this region was of such fame that it was even mentioned in the Manyoshu: (『万葉集』)

...so men took timber of cypress,
split thick pines,
from Tanakami Mountain

in the land of omi,
where the waters race on stone,
and floated it,
like sleek seaweed,
down the Uji river, ...10

And a number of other sources also document that the area provided lumber for the construction of both religious and secular structures in Nara.¹¹ Despite these strong connections with Todai-ji, Saicho is said to have established Rakuya-ji (櫟野寺) in the early 790s and Sokusho-ji (息障寺) in the early ninth century in the Koka district to gain access to the lumber for the construction of the halls on Mount Hiei.

Hosso monks are most frequently thought of as scholars concerned with arcane issues of Buddhist doctrine. However, the *Nihon ryiki* (『日本靈異記』) contains a considerable number of tales describing the proselytizing activities of monks from the Nara temples in districts away from the capital.

In addition, a small number of stories details the activities of such monks who were also engaged in image-making during the eighth century. In all cases these monks had trained in Nara and at one time in their careers held positions of considerable authority. For example, tale number twenty-six in chapter two, "On the Miraculous Sign of the Unfinished Log which was Cut out for Buddha Images but Abandoned," which takes place during the reign of Shomu, involves Kotatsu (広達:act. 750-780), a Hosso monk from Gango-ji who in 773 was appointed one of the ten dhyana masters (zenji:禪師) serving the court.¹² Tale number seventeen in chapter three, "On an Extraordinary Sign of an Unfinished Clay Image Groaning" describes a monk known for his eminent learning named Hokyo (豊慶), also from Gango-ji, who helps repair two clay images at the start of the reign of Emperor Konin (光仁天皇:709-781;r.770-781).¹³ And tale number thirty in chapter three, "On the Monk Who Accumulated Merits by Making Buddhist Images and Showed an Extraordinary Sign at the End of His Life" details the artistic activities of the monk Kanki (観規) who earlier in his career had served as commentator at one of the three great ceremonies of the Nara capital and thus was certainly a scholar monk of the Hosso school. Indeed, Hosso monks were not only scholars engaged in study of some of the most philosophically complex Buddhist doctrines, but were active proselytizers as well. For example,

Hokyo was visiting a temple in the province of Kii that had been founded by the local villagers when he repaired the clay statues of Daimyosho Bosatsu and Hoonrin Bosatsu. And Kanki, had returned from the capital to his home village, Noo, also in the province of Kii where he had "influence on the people."

In addition, these stories reveal that at least some Hosso monks not only spent their time in the state-supported temples of the Nara capital, but often practiced austerities at remote mountain sanctuaries.

Indeed, Kotatsu was performing austerities in the mountains of Yoshino (吉野山) when he walked over a log that was in fact an abandoned Buddhist statue, and which he then carved into statues of Amida, Miroku and Kannon enlisting the help of the local villagers. And a second dhyana master, Eiko (永興: act. 750-780), who also trained at Kofuku-ji (興福寺), and who figures prominently in two of the stories in the *Nihon ryoiki*, practiced in the mountains of the Kumano (熊野山) region and often preached to the local residents.¹⁴ In fact, both Gango-ji and Kofuku-ji (興福寺) had associated

temples that were centers of mountain practice for their monks. Hiso-dera (比蘇寺), located in the hills at the foot of Mount Yoshino was frequented by monks from Gango-ji throughout the eighth century. Muro-ji was founded by in the 770s by Kenkyo (賢環 : 714-793) to provide a comparable site for Kofuku-ji monks. In addition, numerous shrine temple complexes known as jingu-ji (神宮寺) were established during the eighth century, an indication that the accommodation of indigenous deities with the deities of Buddhism, was of considerable importance to the Buddhist establishment of Nara.¹⁵

There is no reason to assume that this active tradition of image-making by Nara monks described in the Nihon ryoiki would have ceased with the shift of the capital to Heian, nor is there any reason to believe that Nara monks would have abandoned mountain practice or the accommodation of indigenous deities, which was a much more integral part of their religious lives than is usually assumed. The careers of Gan'an (願安 : act. 810-840), a monk from Kofuku-ji who participated in the first performance of the Butsumyo-e in 835, and of Kenwa (賢和 : act. 835-870), a monk from Gango-ji who lived on the shores of Lake Biwa in the 860's confirm this hypothesis.

Although many details of Gan'an's life are unknown, contemporary records indicate that he was responsible for reviving a large number of the temples said to have been founded by Roben in the first half of the eighth century. These include Konsho-ji (金勝寺) and the previously mentioned Ryosen-ji, important centers of mountain Buddhist practice to the south and west of Lake Biwa respectively, as well as temples in the Koka district, including Hando-ji, Shofuku-ji (正福寺) and Shobodai-ji (少菩提寺), one of the largest temples in the region until it was destroyed by Oda Nobunaga (織田信長 : 1534-82) in 1570.¹⁶

Gan'an gained official recognition for Konsho-ji in 833 and by the end of the ninth century the temple had been granted two yearly ordinands who were required to recite the Lotus Sutra and the Saishoo-kyo over a six-year period without coming down from the isolated mountain-top where the sanctuary was located. These two monks were also expected to pray to the four most powerful kami in the region for the protection of the state.¹⁷ By reviving Konsho-ji and the other temples, Gan'an asserted the authority of the Nara temples in the region soon after Saicho had established a Tendai presence there, and by praying to the local kami his followers were actively enlisting their help in this process.

Kenwa is not associated with any commentaries on Buddhist texts, rather he seems to have specialized in public works projects in the tradition of Gyoki, for official records from the late 860s detail his activities in repairing harbors on both the shores of Lake Biwa and on the coast of the Inland Sea in the province of Harima.¹⁸ He was also engaged in accommodation of the Buddhist and Shinto traditions. In the early 860s Kenwa was staying near Okutsushima Shrine, located today in the city of Omi Hachiman, when the kami came to him in a dream asking for the assistance of the Buddhist faith to help provide protection for the state.¹⁹ Kenwa complied, and in 865 founded Okutsushima Jingu-ji. Unlike the tales in the Nihon ryoiki for which many of the temples mentioned are today unknown and the appearance of the images said to have been housed in them a mystery, in this case there remains a statue that is stylistically datable to the second half of the ninth century and which is in all likelihood the statue Kenwa carved or had carved for the new temple.

Although now heavily restored with a new head and new hands, the image, now given the designation of Jizo (but also referred to as Hachiman by the shrine where it is now housed), was originally carved

from a single block of Japanese cypress that must have come from an huge tree since there is a natural hollow in the interior.²⁰ Stylistically, the statue is closely related to works such as the standing images of the Healing Buddha at Gango-ji and Muro-ji, both of which were executed in the middle decades of the ninth century. Like Okutsushima Jingu-ji, Muro-ji also had close connections with Nara and with indigenous cults, and it follows that the images that the Hosso monks of the period were sculpting themselves or commissioning would have derived from a common stylistic source.

In fact, the statue at Okutsushima Jingu-ji is not an isolated example of such activity in Omi during this period. Hando-ji, founded by Roben and revived by Gan'an, was the jinguji for Hando Jinja (飯道神社), the kami of which is one of the three indigenous deities which protected the Shuni-e (Omizutori: お水取り) held at the Nigatsu-do at Todai-ji. Mount Hando where the shrine and temple are located is directly northwest of the ill-fated Shigaraki capital, and was where the second abbot of Todai-ji, Jitchu (実忠), cut timbers to shore-up the Daibutsuden in 772.²¹ While rather provincial in its formal qualities, the wide open eyes and the oversized head of the seated image of the Healing Buddha in unpainted wood that was originally housed at Hando-ji calls to mind such works as the seated image of the Healing Buddha at Shin Yakushi-ji (新薬師寺) in Nara. Although the specific date of the Hando-ji image is difficult to ascertain (I believe that it is datable to between 875 and 925), the history of the site makes it highly likely that this image was produced at the behest of a Nara monk.

The presence of monks from Nara and the influence of Kofuku-ji in particular can be documented in other parts of Shiga during this period as well. For example, Taicho (泰澄: 682-767), like Kotatsu and Eiko mentioned in the stories in the Nihon ryoiki quoted above, journeyed from the provinces, in his case Echizen, to study in Nara in the eighth century. His biography states that while he had his first vision of Eleven-headed Kannon at the age of fourteen, it was not until he went to the capital in 736 that he received a copy of the Eleven-headed Kannon sutra; given to him by Genbo (玄昉: d. 746), probably the most influential Hosso monks of the day.²² Taicho is said to have used this sutra to pray to Eleven-headed Kannon to help control the outbreak of smallpox that ravaged Japan in the following year. The temples at the northern end of Lake Biwa house numerous images of Eleven-headed Kannon, and many such as Keisoku-ji are said to have been founded by Taicho. Although none of these statues dates to Taicho's lifetime, his worship of Eleven-headed Kannon for immanent ends provides a context for all of these statues that closely ties them to the religious practices current in Nara in the eighth century.

In addition, just south of that part of Shiga is Mount Ibuki (伊吹山) where a Todai-ji monk named Sanju (三修: 829-899) secluded himself for five years in the early 850s and where he established temple to pray for the protection of the nation. The deity on which Sanju focused his attention was the Healing Buddha and over time Mount Ibuki became an important locus or rituals designed to protect the capital from plague.²³ Like Eleven-headed Kannon, images of the Healing Buddha were frequently the focus of penitential rituals during the eighth century and many of the temples founded by Roben house statues of both deities.

While the activities of the Nara monks in Omi spreading the Buddhist faith through the founding of temples and the making of images in the ninth century is particularly well documented, it was by no means an isolated phenomenon. For example, a large number of temples in northern Japan, including

Shojo-ji were founded by the Hosso monk Tokuitsu.²⁴ His active promotion of a Nara agenda is particularly well documented through his debates with Saicho. But Saicho also followed Tokuitsu into the eastern provinces, to challenge him geographically as well as intellectually.

A reevaluation of the sculpture of the ninth century reveals that the Buddhist transformation of Japan as documented by the evidence of extant images and their histories involved extensive competition among different groups. Conscious of the threat of the expanding sectarian exclusivity of the Tendai sect, Nara monks founded new temples and revived old ones to secure a geographic and economic base for their activities. To achieve these goals they commissioned images of deities that responded to the immediate needs of the populace in styles directly derived from the wooden sculpture current in Nara during the late eighth century. For their part the Tendai monks responded to these challenges by establishing sanctuaries where the influence of Nara was dominant. While Kukai and Saicho will certainly continue to be better known, in fact it is the activities of such lesser known prelates as Gan'an and Kenwa, Taicho and Tokuitsu, who shaped the religious lives of the Japanese in these remote districts during the ninth century and beyond.

Notes

1. See for example: Asaka Toshiki. *Nihon kodai shukogyo no kenkyu* (Tokyo: Hosei daigaku shuppanyoku, 1971), pp. 382-398; Shimizu Zenzo. "Heian jidai shoki ni okeru konin soshiki ni tsuite no ikkosatsu," *Nanto bukkyo*, no. 19 (Dec., 1966), pp. 16-33, and "Heian zenki ni okeru konin soshiki no henshen: zokumei no bukko kara somei no busshi e." I-III, *Bukkyo geijutsu*, no. 133 (Nov., 1980), pp. 72-89; no. 135 (Mar., 1981), pp. 61-74; no. 141 (Mar., 1982), pp. 96-118.
2. See Otsu-shi rekishi hakubutsukan, ed., *Otsu no butsumo* (Otsu: Otsu-shi rekishi hakubutsukan, 1997), entry 10.
3. Also included in this group is the standing Bodhisattva at Dairyō-ji in Kobe, Hyogo Prefecture. See Nara kokuritsu hakubutsukan, ed., *Tempyo* (Nara: Nara kokuritsu hakubutsukan, 1998), entries 73-74.
4. For an excellent survey of this tendency in the history of Buddhism, see Ueshima Tomu, "Heian shoki bukkyo no saikento," *Bukkyo shigaku kenkyu*, vol. 40, no. 2 (Dec., 1997), pp. 38-68.
5. Kuroda Toshio, "The Development of the Kenmitsu System as Japan's Medieval Orthodoxy," trans. James C. Dobbins, *Japanese Journal of Religious Studies*, vol. 23, nos. 3-4 (1996), pp. 246-252.
6. For an excellent survey of these debates, see Paul Groner, *Saicho--the Establishment of the Japanese Tendai School* (Berkeley: Institute of Buddhist Studies, 1984), pp. 90-106.
7. *Shoku nihon koki*, entry for Jowa 9.12.17. *Shoku nihon koki*, Shintei zoho kokushi taikai, Kuroita Katsumi, ed., (Tokyo: Yoshikawa kobunkan, 1929-1966), p. 148.
8. *Nihon Sandai jitsuroku*, entry for Jogan 9.6.21. *Nihon Sandai jitsuroku*, Shintei zoho kokushi taikai, (Tokyo: Yoshikawa kobunkan, 1929-1966), p. 218.
9. *Nihon Sandai jitsuroku* entry for Jogan 18.6.21. *Nihon Sandai jitsuroku*, p. 378.
10. Ian Hideo Levy, *The Ten Thousand Leaves* (Princeton: Princeton University Press, 1981), p. 63.
11. Michita Ryoshu, "Handosan no shugendo," in Gorai Shigeru, ed., *Kinki reizan to shugendo*, Sangaku

- shukyoshi kenkyu sosho, vol. 11 (Tokyo: Meicho shuppan, 1978), pp. 83-87.
12. For a translation of the tales, see Kyoko Nakamura, *Miraculous Stories from the Japanese Buddhist Tradition--the 'Nihon ryoiki' of the Monk Kyokai* (Cambridge: Harvard University Press, 1973), pp. 196-197. For Kotatsu's appointment see the Shoku nihongi entry for Hoki 3.3.6.
13. Nakamura, *Miraculous Stories*, pp. 244-245.
14. Two tales in *Miraculous Stories* describe the activities of Eiko, the first and second in chapter three, see Nakamura, *Miraculous Stories*, pp. 223-226.
15. For a list of the jingu-ji founded in the eighth century, see Tsuji Hidenori, *Shimbutsu shugo* (Tokyo: Rokko shuppan, 1986), pp. 48-49.
16. For a list of the temples revived by Gan'an, see the Kofuku-ji kanmu choso, included in *Dai Nihon bukkyo zensho, Jishi sosho*, vol. 3, rpt. (Tokyo: Daiichi shobo, 1978), pp. 115-136.
17. One was to pray to the kamis Hando and Yamatsuteru and one to the kamis Hyozu and Mikami. Dajokampū for Kanpyo 9.6.23 as quoted in *Ritto rekishi minzoku hakubutsukan*, ed., *Konsho-ji* (Ritto: Ritto rekishi minzoku hakubutsukan, 1995), p. 115.
18. The work in Omi occurred at a place called Wani, located in Shiga-cho on the western shore of Lake Biwa and the work in Harima occurred at Uozumi-cho in Nishi Akashi city. See Dajokanpu for Jogan 9.3.27 and 9.4.17.
19. *Nihon Sandai jitsuroku* entry for Jogan 7.4.2. *Nihon Sandai jitsuroku*, p.153.
20. The statue was first studied by Sasaki Susumu, "Omi Hachiman shi Shima-machi Jizo-do no Jiz bosatsu ryuzo," *Hakubutsukangaku nempo*, no. 16 (1984); and more recently by Nagasaki Ichiro, "Heian shoki ni okeru Nanto shoshu no chiho jiin keiei to mokucho no seisaku--Gango-ji Hosso shu no baai o rei toshite," *Bukkyo geijutsu*, no. 206 (Jan., 1993), pp. 30-42.
21. Michita, pp. 85-86.
22. For the biography of Taicho, see Hongo Masatsugu, "Kodai Hokuriku no shukyo bunka to koryu," in *Kodai oken to koryu 3 Koshi to kodai no Hokuriku* (Tokyo: Meicho shuppan, 1996), pp. 372-377.
23. See Nagaoka Ryusaku. "Jingo-ji Yakushi nyoraizo no iso--Heian jidai shoki no yama to Yakushi." *Bijutsu kenkyu*, no. 395 (Mar., 1995), pp. 1-27.
24. For a list of the temples founded by Tokuitsu, see Tanaka Hisao, *Butsuzo no aru fukei* (Tokyo: Shinshindo, 1989), p. 207.

Ⅲ、奈良仏教関係研究文献目録

以下の目録は、奈良仏教・古代寺院・『日本霊異記』をキーワードに作製した。
掲載の年代は、1987年から1997年までとした。
著者・論題・発行所・発行年（西暦）の順に掲載した。

愛知県議会事務局

『小幡廃寺』第2・3次調査報告 東海古文化研究所(愛知) 1985～87.08

赤井 靖子

「中河内地方の仏教文化とその背景」 『古代史の研究』10 関西大学古代史研究会
1995.06

秋川 観暎

「僧尼令雑考(1) 一道教関係史料を中心に」 『東洋史論集』4 東北大学 1990.01

浅井 和春

「神護寺薬師如来像」 『国華』1090 朝日新聞社 1986.01

「菩薩半跏像/長野県観松院蔵」 『国華』1116 朝日新聞社 1988.09

朝枝 善照

「看病禅師考『日本霊異記』の諸例」 『援助的人間関係』 西光義徹編 永田文昌堂
1988.06

「『日本霊異記』の史料性の検討」 『仏教文化研究所紀要』27 龍谷大学 1989.02

「寺院の研究(3)」(他) 『仏教文化研究所紀要』27 龍谷大学 1989.02

「日本霊異記研究序説」 『印度学仏教学研究』38-1 1989.12

『日本霊異記研究』 永田文昌堂 1990.03

「日本古代における仏教受容の一考察」 『印度学仏教学研究』40-1 1991.12

『律令国家と仏教』(編) 論集奈良仏教2 雄山閣出版 1994.07

「『日本霊異記』と「五台山仏教文化圏」について」 『日本古代国家の展開』下 門脇
禎二編 思文閣出版 1995.11

芦名 裕子

「万葉集に見る浄土信仰」 『論輯』18 駒沢大学大学院国文学会 1990.02

「上代の維摩講一万葉集卷八・一五九四番歌の背景」 『宗教研究』65-4 日本宗教学会
1992.02

「万葉集に見る仏教と儒教」 『大学院研究論集』17 大正大学 1993.03

網 伸也

「摂津の古墳と寺院」 『考古学』60 1997.08

荒木 敏夫

「古代国家と民間祭祀」 『歴史学研究』560 1986.10

- 「仏教の展開と寺院の造営」 『新版古代の日本』7 中部 小林達雄・原秀三郎編 角川書店 1993.01
- 有富 由紀子
「日本古代の初期地方寺院の研究－白鳳時代を中心として－」 『史論』42 東京女子大学歴史学研究室 1989.03
『『靈異記』にみえる「寺」の存在形態』 『日本靈異記の原像』 平野邦雄編 角川書店 1991.07
- 有吉 重蔵
「武蔵国分寺の創建」 『古代寺院と仏教』 鶴岡静夫編 名著出版 1989.04
「武蔵国分寺」 『月刊考古学ジャーナル』318 1990.05
「武蔵国分寺の構造」 『歴史手帖』23-10 名著出版 1995.10
- 飯島 太千雄
「今、玄昉」 『日本歴史』572 1996.01
- 飯島 義雄
「上野国分寺における地震被害跡の認識とその歴史的意義」 『紀要』17 群馬県立歴史博物館 1996.03
- 飯沼 暢康
「池田山南麓における古代寺院跡の発見－池田町高畑遺跡発掘だより－」 『岐阜史学』91 1996.11
- 池田 敏宏
「武蔵国における平安仏教受容の様相－道忠系天台教団成立の社会背景(予察)－」 『土曜考古』14 土曜考古学研究会 1989.05
- 池見 澄隆
『『靈異記』みる慚愧』 『宗教研究』66-4 1993.03
- 伊佐治 康成
「寺田と律令法をめぐる二つの問題」 『学習院大学人文科学論集』4 1995.09
- 石井 公成
「上代日本仏教における誓願について－造寺造像伝承再考－」 『印度学仏教学研究』40-2 1992.03
「誓願の威力か亀の恩返し－『日本靈異記』上巻第7縁の再検討－」 『仏教学部研究紀要』53 駒沢大学 1995.03
- 石井 義信
「古代寺院に関する一考察」 『論集』91 大阪商業大学商経学会 1991.12
- 石上 英一
「弘福寺文書の基礎的考察」 『東洋文化研究所紀要』103 中央大学東洋文化研究所 1987.03
- 石川 克博
「山王麁寺の創建期について－素弁八葉蓮華文軒丸瓦をめぐって－」 『群馬県史研究』26 1987.12
- 石村 喜英

- 『日本古代仏教文化史論考』 山喜房仏書林 1987.05
「古代寺院に見る浴室雑考」 『考古学叢考』中 斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編
吉川弘文館 1988.10
「古代寺院に見る大衆院の性格」 『日本仏教史学』25 1991.03
『仏教考古学研究』 雄山閣出版 1993.11
- 泉谷 康夫
「物部氏と宗教」 『日本書紀研究』16 塙書房 1987.12
- 伊勢崎市教育委員会社会教育課
『上植木廃寺発掘調査概報』昭和 60 年度.61 年度 伊勢崎市教育委員会(群馬) 1986.03
～ 87.03
『上植木廃寺発掘調査概報』平成 2 年.3 年度 伊勢崎市教育委員会(群馬) 1992.03
- 磯野 浩光
「山背の古道と寺院跡について」 『京都府埋蔵文化財論集』2 1991.03
- 板橋 正幸
「下野国分寺・国分尼寺の調査」(他) 『日本歴史』589 1997.06
- 一宮町教育委員会
『甲斐国分寺跡一寺域及び遺構確認を目的とした緊急発掘調査報告書一』 一宮町教育
委員会(山梨) 1990.03
- 糸井 仁
「8 世紀在地祭祀の重層構造」 『歴史における政治と民衆』北山茂夫追悼日本史学論集
日本史論叢会編・刊 1986.01
- 稲垣 晋也
「国分寺はなぜ建てられたか」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所
1991.09
- 稲城 吉一
「香山寺創建考」 『紀要』24 女子美術大学 1993.01
- 稲沢市教育委員会
『稲沢市文化財調査報告』40 東畑廃寺跡発掘調査報告書 5 稲沢市教育委員会(愛知)
1993.03
- 稲次 保夫
「日本古代の仏像彫刻およびその場について」 『教育学部紀要』人文・社会科学 18
愛媛大学教育学部 1986.02
- 稲木 吉一
「香山寺創建考」 『紀要』24 女子美術大学 1993.10
- 井上 薫
「行基の勧進・日本国地図・土塔」 『末永先生米寿記念献呈論文集』坤 末永先生米寿
記念会編 奈良明新社 1985.06
「大雁塔と小雁塔が奈良仏教に与えた影響」 『青陵』61 榎原考古学研究所 1987.01
「流沙を涉り来唐・来日した菩提僊那」 『靈山寺と菩提僧正記念論集』 堀池春峰編
靈山寺 1988.05

- 『行基事典』(編) 国書刊行会 1997
- 井上 一念
「奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像－石山寺像を中心に－」 『美術研究』 353
1992.03
- 井上 秀雄
「日本と朝鮮の仏教伝来」 『東洋学術研究』 29-4 東洋哲学研究所 1990.12
「文化史からみた仏教公伝の諸様相」 『仏教史学研究』 39-1 1996.10
- 今城 甚造
「天皇号の成立－造像記研究序説－」 『研究紀要』 17 武蔵野美術大学・武蔵野美術短期大学 1987.03
- 井山 温子
「和泉地方における行基集団の形成－とくに須恵器生産者との関連から－」 『史泉』 66
関西大学史学・地理学会 1987.09
「中河内地方の仏教文化とその背景」(他) 『古代史の研究』 10 関西大学古代史研究会 1995.06
「古代の祭祀・信仰と女性－女性為政者の仏教信仰に視点をおいて－」 『ヒストリア』
153 1996.12
- 伊能 秀明
「僧尼令外国寺条の研究」 『大学院紀要』(法学論 23) 明治大学大学院 1986.02
「古代仏教統制法「僧尼令」の犯罪と刑罰に関する一考察－古代法注釈聚成「僧尼令集解」における歴史的な法解釈論をめぐって－」 『大学院紀要』 24 明治大学大学院
1987.02
『日本古代国家法の研究』 巖南堂書店 1987.10
- 入部 正純
『日本靈異記の思想』 法蔵館 1988.12
- 岩井 共二
「裳懸座の表現から見た飛鳥仏の諸相」 『美学美術史研究論集』 12 名古屋大学文学部
美学美術史研究室 1994.12
- いわき市教育文化事業団
『夏井廃寺跡』 福島県指定史跡夏井廃寺塔跡周辺範囲確認調査概報 2 いわき市教育
文化事業団 1988.03
- 岩佐 光晴
「野中寺弥勒菩薩半跏像について」 『紀要』 27 東京国立博物館 1992.03
「観心寺観音菩薩立像について」上,下 『MUSEUM』 531.532 東京国立博物館 1995.06
～ 07
- 磐田市埋蔵文化財センター
『遠江国分寺跡周辺国分寺・国府台遺跡』 昭和 63 年度 磐田市教育委員会(静岡)
1991.01
『国分寺・国府台遺跡』 第 5 次地点 磐田市教育委員会(静岡) 1992.03
『大宝院廃寺遺跡(第 3・5・6 次)観音寺山古墳(周堀)発掘調査報告書』 磐田市教育委

- 員会(静岡) 1992.12
『遠江国分寺跡周辺国分寺・国府台遺跡』 平成3年度 1.2 磐田市教育委員会(静岡)
1992～93
『遠江国分寺跡国分寺・国府台遺跡—発掘調査報告』 平成4年度 磐田市教育委員会
(静岡) 1993.03
- 岩永 省三
「蟹満寺本尊・薬師寺金堂本尊を巡る諸問題—学説史的検討—」 『古文化談叢』32 九州古文化研究会 1994.05
- 上田 設夫
「靈異記説話の構造」 『国語国文』53-7 京都大学国語学国文学研究室 1984.07
「日本靈異記説話と仏典」 『国語国文』54-8 京都大学国語学国文学研究室 1985.08
- 上田 睦
「寺を建てた氏族たち—摂・河・泉—」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09
「河内・和泉の寺院と古墳」 『考古学』60 1997.08
- 上田市教育委員会
『史跡信濃国分寺跡 史跡現状変更申請に伴う緊急発掘調査報告書』 上田市文化財調査報告書34 上田市教育委員会(長野) 1989.03
- 上田市立信濃国分寺資料館
『信濃の古代寺院』 上田市立信濃国分寺資料館(長野) 1984.07
『信濃国分寺跡のあらまし』 上田市立信濃国分寺資料館(長野) 1986.02
- 上原昭一
『鎮護国家と呪術』 図説日本仏教の世界2(他編) 集英社 1989
- 上原 真人
「東国国分寺の文字瓦再考」 『古代文化』41-12 1989.12
- 上村 和直
「瓦製塔の性格」 『季刊考古学』34 雄山閣出版 1991.02
- 宇佐美 正利
『日本靈異記』からの引用『三宝絵詞』の場合 『日本宗教史論纂』 下出積與編 桜楓社 1988.05
『日本靈異記とその時代』 おうふう 1995.05
- 牛山 佳幸
「信濃清滝寺と加賀温泉寺—古代日本海域と信濃の交流—」 『紀要』2 長野市立博物館 1994.03
- 内田 律雄
「出雲・長者原廃寺と神門郡日置郷」 『青山考古』7 青山考古学会 1989.05
- 宇野 茂樹
「近江の神仏習合について」 『神道古典研究会報』8 1986.10
「古代河内の氏族と仏教」 『商業史研究所紀要』1 大阪商業大学 1990.01
「古代における摂津・河内・和泉の特殊な社寺の位置付け—特に四天王寺を中心として

- 一) 『商業史研究所紀要』3 大阪商業大学 1994.01
- 梅宮 茂
「初期密教寺院遺跡の考古学的考察－南奥州の安積弘隆寺・流麿寺等を中心として－」
『福島考古』28 1987.02
- 江谷 寛
「山城国紀伊寺」『古代世界の諸相』 角田文衛先生傘寿記念会編 晃洋書房 1993.09
「古代中世の山岳寺院」『考古学ジャーナル』382 1994.11
「山岳寺院研究の課題」『考古学ジャーナル』426 1998.01
- 海老名市遺跡調査会
「相模国分二寺に使われた石材の産地について」『えびなの歴史－海老名市史研究』7
海老名市史編集委員会編 1995.08
- 近江 俊秀
「岡寺式軒瓦出土寺院をめぐる二、三の問題」『考古学雑誌』81-3 1996.03
「大和の古墳と寺院」『考古学』60 1997.08
- 近江 昌司
「謎につつまれた山岳寺院」『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所
1991.09
「古代山岳寺院小考」『考古学ジャーナル』426 1998.01
- 大分県教育委員会
『宇佐宮弥勒寺宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査概報』2～4 大分県立宇佐風土記の丘歴史
民俗資料館 1985.03～87.03
- 大川 清
「上野国分寺文字瓦人名小考」『翔古論聚』 久保哲三先生追悼論文集刊行会編 真陽
社 1993.05
- 大川 敬夫
「地形からみた尾羽麿寺」『考古学叢考』中 斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編 吉
川弘文館 1988.10
- 大阪府教育委員会
『向泉寺跡発掘調査概要』 昭和60年度 大阪府教育委員会 1986.03
『寛弘寺遺跡発掘調査概要』5 大阪府教育委員会 1987.03
- 大城 康雄
「池辺寺跡」『考古学ジャーナル』382 1994.11
- 太田 晶子
「葉師寺東院堂聖観音立像の製作年代について－服飾史の視点を中心にしながら－」
『紀要』29 成安女子短期大学総合芸術研究所 1991.03
- 太田 三好
「豊浦寺の瓦」『天理参考館報』6 天理大学 1993.01
- 太田 愛之
『「日本靈異記」の社会経済史的研究序説』上.中.下 『経済学研究年報』28.29.30 早稲
田大学大学院経済学研究科 1988.12～89.12

「揺籃期の「家」－『日本霊異記』の説話にみえる「家」の構造モデル－」 『社会経済史学』 57-4 1991.11

「古代村落の再編－『日本霊異記』の説話にみえる村落の構造モデル－」 『日本史研究』 372 1993.08

大塚 章

「可児・加茂地区の古代寺院－同範・同系軒丸瓦の展開を中心として－」 『岐阜史学』 91 1996.11

大坪 秀敏

「大仏造営過程における百済系渡来人－百済王氏を中心に－」 『国史学研究』 15 龍谷大学国史学研究会 1989.03

「宣教についての一試論－百済寺の開基としての歴史的背景－」 『仏教文化研究叢書』 6 龍谷大学 1996.02

「宣教についての一試論」 『日本古代の社会と宗教』 日野昭編 永田文昌堂 1996.02

大西 貴夫

「地方寺院成立の一形態－伊勢・伊賀における軒瓦の展開－」 『考古学論攷』 19 檀原考古学研究所 1995.03

大西 龍峯

「元興寺智光の出自及び本貫」 『仏教学部研究紀要』 48 駒沢大学 1990.03

大橋 一章

「平城京における薬師寺の造営」 『美術史研究』 23 早稲田大学美術史学会 1986.02

「法輪寺の建立を伝える文献について」 『文学研究科紀要－文学・芸術学編』 別冊 35 早稲田大学大学院文学研究科 1990.01

「法隆寺金堂釈迦三尊像の制作年代について」 『仏教芸術』 204 毎日新聞社 1992.09

「勅願寺と国家官寺の造営組織」 『仏教芸術』 222 毎日新聞社 1995.09

「大寺考」 『文学研究科紀要－文学・芸術学編』 41 早稲田大学大学院 1996.02

大橋 信弥

「信楽殿壊運所について－天平末年の石山寺造営の背景－」 『日本古代の祭祀と仏教』 佐伯有清先生古稀記念会編 吉川弘文館 1995.03

「寺院造営の進展と渡米氏族」 『考古学』 60 1997.08

大橋 泰夫

「下野国分寺創建期の状況」 (他) 『考古学ジャーナル』 318 1990.05

「下野国分寺・国分尼寺の調査」 (他) 『日本歴史』 589 1997.06

大日方 克巳

「造石山寺所と儀礼・祭祀・年中行事」 『日本歴史』 467 1987.04

『古代国家と年中行事』 吉川弘文館 1993.09

大宮 康男

「法隆寺上御堂釈迦三尊像に就いて」 『教育学部研究報告』 人文・社会科学篇 43 静岡大学 1993.03

大矢 良哲

「道場法師伝説の再検討」 『研究紀要』 24 奈良工業高等専門学校 1989.03

大山 誠一

「長谷寺銅版法華説相図銘の年代と思想」 『日本律令制論集』上 笹山晴生先生還暦記念会編 吉川弘文館 1993.09

「野中寺弥勒像」の年代について 『国史研究』95 弘前大学 1993.10

「再び「長谷寺銅板法華経説相図銘」について―片岡直樹氏の批判に接して―」 『仏教芸術』218 1995.01

大山 真先

「考古学と弘福寺領讃岐国山田郡田図」 『研究紀要』1 香川県埋文センター 1993.03

大脇 潔

「いろいろな基壇化粧」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09

「忘れられた寺―青木麿寺と高市皇子」 『翔古論聚』 久保哲三先生追悼論文集刊行会編 真陽社 1993.05

「寺院址調査の成果と課題」 『展望考古学』 考古学研究会 40周年記念論集考古学研究会 1995.06

「渡来系氏族の古墳・寺院研究の現状」 『考古学』60 1997.08

「飛鳥の渡来系氏族寺院と軒瓦」 『考古学』60 1997.08

大和久 震平

『古代山岳信仰遺跡の研究―日光山地を中心とする山頂遺跡の一考察』 名著出版 1990.07

大和田 岳彦

「大仏造立以前の南都寺院伽藍」 『日本歴史』588 1997.05

小笠原 好彦

『近江の古代寺院』(他) 近江の古代寺院刊行会 1989.05

「寺を建てた氏族たち―大和・山城・近江―」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09

「近江の仏教文化」 『古代を考える近江』 吉川弘文館 1992.05

「近江の古代寺院と条里」 『条里制研究』8 1992.12

「渡来系氏族の古墳・寺院研究の現状」 『考古学』60 1997.08

「近江の渡来系氏族寺院と軒瓦」 『考古学』60 1997.08

岡田 英男

「飛鳥時代寺院の造営計画」 『研究論集』8 奈良文化財研究所 1989.03

「建築からみた当麻曼荼羅の周辺」 『紀要』22 奈良大学 1994.03

岡田 芳朗

『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』の成立 『古代寺院と仏教』 名著出版 1989.04

岡藤 良敬

「造石山寺所関係文書・史料篇」 『総合研究報』100(人文科学編 48) 福岡大学総合研究所 1987.03

「奈良時代の造営史料(1) 造石山寺所関係文書」 『人文論叢』20-2 福岡大学総合研究所 1988.09

「造石山寺所公文案帳の復原案・補遺」 『日本歴史』528 1992.05

岡村 秀典

「滋賀県雪野寺跡の測量調査」(他) 『史林』70-4 1987.07

岡本 東三

「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について—その分布の意味するもの—」 『千葉史学』22
1993.05

「東国の川原寺式軒瓦の波及年代をめぐって」 『古代国家と東国社会』 千葉歴史学会
編 高科書店 1994.04

「紀寺式軒瓦の編年的位置について—東国の紀寺式軒瓦の視点から—」 『千葉史学』25
1994.11

『東国の古代寺院と瓦』 吉川弘文館 1996.01

岡本 桂典

「仏たちへの憧憬」 『考古学』59 1997.05

小川 光陽

「天平彫刻の精神 芸術精神の展開について」 『日本精神史』 石田一良編 ペリカン
社 1988.03

奥田 尚良

「蟹満寺本尊攷」 『仏教芸術』208 1993.05

奥田 尚

「塔心礎の石種—古代河内・大和の寺院を中心として—」 『古代学研究』131 古代学
会 1995.09

奥野 中彦

「8世紀寺田経営をめぐる二、三の問題」 『史聚』21 駒沢大学史聚会 1986.08

「古代東北における神と仏」 『民衆史研究』35 1988.05

尾崎 忠司

「説話の伝播と創造—欣勝寺の雷井伝説をめぐって—」 『紀要』19 湊川女子短期大学
1986.03

小沢 毅

「吉備池廃寺金堂の調査」 『考古学ジャーナル』422 1997.10

小田 悦代

「説話にみる僧の験力—報いと護法—」 『宗教民俗研究』6 日本宗教民俗研究会
1996.06

小田 富士雄

「出土誕生仏とその一括遺物 豊前・瑞雲寺跡出土品」 『東アジアと日本』 田村圓澄
先生古稀記念会編 吉川弘文館 1987.12

「日向国分寺の成立」 『MUSEUM』496 東京国立博物館 1992.08

鬼石町教育委員会

『古代東北仏教の源流—シンポジウム』 新人物往来社 1994.03

小野 一之

「聖徳太子建立46カ寺説について」 『中央史学』11 中央大学中央史学会 1988.03

「寺院縁起と聖徳太子建立伝承 大和放光寺・平隆寺を中心に」 『中央史学』15 中央

- 大学中央史学会 1992.03
- 何 燕生
「奈良時代の「禪師」に関する一試論：禪の日本への初伝との関連において」 『文化』
57-3.4 東北大学 1994.03
- 垣内 和孝
「宮中供奉僧に関する覚書」 『大学院論究－文学研究科篇』 23-1 中央大学大学院
1991.03
「内供奉十禪師の再検討」 『古代文化』 45-5 1993.05
「内道場考」 『寺院史研究』 4 1994.10
- 加古川市教育委員会教育指導部文化課
『西条麿寺 発掘調査報告書』 加古川市文化財調査報告 9 加古川市教育委員会(兵庫)
1985.03
- 梶川 敏夫
「奈良時代の山岳寺院」 『季刊考古学』 34 雄山閣出版 1991.02
- 梶谷 亮治
「総論 我が国における仏教説話絵の展開」 『仏教説話の美術』 奈良国立博物館編
思文閣出版 1996.03
- 梶山 勝
「舞木麿寺跡の出土遺物をめぐって－小栗鉄次郎氏の調査資料を中心として－」 『名
古屋市博物館研究紀要』 16 1993.03
- 柏原市教育委員会
『鳥坂寺 寺域の調査』 柏原市教育委員会(大阪) 1985.05 ～ 87.03
- 梶原 瑞司
「広隆寺創立伝承考」 『歴史と伝承』 日野昭博士還暦記念会編 永田文昌堂 1988.04
- 風久保西遺跡発掘調査団
『相模国分尼寺関連遺跡発掘調査概報－第1次調査』 相武考古学研究所(神奈川)
1989.12
- 堅田 修
「初期律令仏教興隆の一側面」 『歴史と伝承』 日野昭博士還暦記念会編 永田文昌堂
1988.04
「亀報恩説話の展開」 『大谷学報』 68-2 大谷大学大谷学会 1988.09
『日本古代信仰と仏教』 法蔵館 1991.02
『日本古代寺院史の研究』 法蔵館 1991.03
- 勝浦 令子
「木簡からみた北宮写経」 『史論』 44 東京女子大学歴史研究室 1991.03
「『靈異記』にみえる盗み・遺失物をめぐる諸問題」 『日本靈異記の原像』 平野邦雄編
角川書店 1991.07
「法華滅罪之寺と洛陽安国寺法華道場－尼と尼寺の日唐比較研究の課題－」 『史論』 46
東京女子大学歴史研究室 1993.03
「僧尼の名と位の男女差について－法名と俗名、僧位・尼位と俗位の関係－」 『日本

律令制論集』下 笹山晴生先生還暦記念会編 吉川弘文館 1993.09

「八世紀の内裏仏事と女性－「仏名会」前身仏事を手がかりに－」 『仏教史学研究』38-1
仏教史学会 1995.09

「称徳天皇の「仏教と王権」－ 8世紀の「法王」観と聖徳太子信仰の特質－」 『史学
雑誌』106-4 1997.04

「古代の「家」と僧尼－ 8世紀の中央貴族層の公的「家」を中心に－」 『日本史研究』416
1997.04

加藤 優

「興福寺と伝戒師招請」 『律令国家の構造』 関晃先生古稀記念会編 吉川弘文館
1989.01

兼康 保明

「寺造りのまじない」 『季刊考古学』34 雄山閣出版 1991.02

上川 通夫

「天平期の天皇と仏教－菩薩戒の受戒をめぐる－」 『新しい歴史学のために』197
民主主義科学者協会京都支部歴史部会 1989.11

「国分寺建立政策の基調」 『続日本紀研究』274 1991.04

「ヤマト国家時代の仏教」 『古代文化』46-4 1994.04

「律令国家形成期の仏教」 『仏教史学研究』37-2 仏教史学会 1994.11

神谷 行吉

「蟹満寺縁起譚の淵源－機織りの伝承基盤をめぐる－」 『相模国文』11 相模女子大
学 1984.03

「少子部連倭嬴とその靈格」 『相模国文』17 相模女子大学 1990.03

「少名毘古那神と王権伝承－常世国からの顕現をめぐる－」 『相模国文』20 相模女
子大学 1993.03

亀田 修一

「豊前の古代寺院跡」 『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念事業会編 同
朋舎出版 1987.11

「瓦から見た国分寺の造営－四国・四国地域－」 『考古学ジャーナル』318 1990.05

「塑像と供仏」(他) 『季刊考古学』34 雄山閣出版 1991.02

「瀬戸内海沿岸地域の古代寺院と瓦」 『古代王権と交流 6 瀬戸内海地域における交流
の展開』 松原弘宣編 名著出版 1995.12

「九州の古墳と寺院」 『考古学』60 1997.08

亀田 博

「古代寺院の成り立ち」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09

河合 英夫

「岡上廃堂址の年代観について－三輪瓦窯址関連遺物の検討－」 『多摩考古』22 1992.05

「岡上廃堂址採集の古瓦について」 『多摩考古』27 1997.05

河上 邦彦

「川原寺下層出土の土器」 『青陵』89 榎原考古学研究所 1995.11

川上 元

- 「信濃国分寺跡研究の今後の課題」 『信濃の歴史と文化の研究』 黒坂周平先生の喜寿を祝う会編・刊 1990.11
- 川岸 宏教
「仏教伝来と古代王権」 『古代王権と氏族』 鶴岡静夫編 名著出版 1988.08
「四天王寺の創立と発展」 『古代寺院と仏教』 鶴岡静夫編 名著出版 1989.04
- 河北 秀実
「西谷遺跡(柄ヶ池瓦窯)・逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺採集瓦の同範関係と想定される供給パターン」 『Mie history』7 三重歴史文化研究会 1994.11
- 川崎 晃
「山田殿像」 銘小考 『紀要』14 NHK学園 1990.03
- 川尻 秋生
「資財帳と交替公文 広隆寺帳を中心として」 『日本歴史』503 1990.04
「内閣文庫所蔵『広隆寺縁起』」 『寺院史研究』1 1990.08
- 川瀬 由照
「東大寺法華堂の造営と不空羼索観音像の造立について」 『仏教芸術』210 1993.09
「東大寺法華堂執金剛神像の造立と原所在について」 『南都仏教』72 1995.11
- 川添 昭二
『彦山編年史料-古代中世編-』(他編校訂) 文献出版 1986.01
- 河田 貞
「仏塔を象った埋経容器」 『日本文化史研究』23 帝塚山短期大学 1995.07
- 河名 勉
「房総の写経生の特質」 『千葉史学』27 1995.12
- 河音 能平
「草創期神宮寺の神像について」 『人文研究-史学』45-10 大阪市立大学文学部 1993.12
- 河野 一也
「奈良時代寺院成立の一端について」1~3(他) 『神奈川考古』24~27 1988.04~91.05
「奈良時代寺院成立の一端について(4)-相模国足下郡千代廃寺の古瓦を中心として-」 『神奈川考古』29 1993.05
- 河原 由雄
「肖像を奉祀する時代以前-栄山寺八角堂の追善堂的性格-」 『大和文華』96 大和文化研究会 1996.09
- 河村 健史
「奈良時代密教の信仰と造像」 『龍谷大学大学院研究紀要-人文科学』15 1994.01
- 元興寺文化財研究所
『日本浄土曼荼羅の研究-智光曼荼羅・当曼荼羅・清海曼荼羅を中心として-』 中央公論美術出版 1987.02
- 菊竹 淳一
「高麗仏考-西日本に伝存する作品による-」 『九州文化史研究所紀要』33 九州大学文学部附属九州文化史研究施設 1988.03
- 菊地 章太

- 「金鐘寺金光明寺同一説に関する疑問」 『史境』 19 歴史人類学会 1989.10
 菊地 大樹
- 「奈良時代の僧位制と持経者」 『遙かなる中世』 15 中世史研究会 1996.03
 北 康宏
- 「法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘文再読－法隆寺と膳氏－」 『博物館学年報』 27 同志社
 大学 1995.12
- 北口 英雄
- 「栃木県の平安仏－一本彫刻について－」 1 (他) 『教育学部紀要』 1-37 宇都宮大学
 教育学部 1987.02
- 木建 正宏
- 「飛鳥・橘寺創建をめぐる」 『花園史学』 14 花園大学 1993.11
- 「紀伊国における古代経塚の展開－造営の背景と遺構の形式分類試案－」 『和歌山地方
 史研究』 29.30 1996.01
- 木立 雅朗
- 「北陸の古墳と寺院」 『考古学』 60 1997.08
- 城戸 裕子
- 『万葉集』と奈良朝仏教 『宗教研究』 63-4 1990.02
- 鬼頭 清明
- 「奈良時代の格と院政期の東大寺」 『日本古代の政治と文化』 青木和夫先生還暦記念
 会編 吉川弘文館 1987.02
- 「国府・国庁と仏教」 『研究報告』 20 国立歴史民俗博物館 1989.03
- 「仏教の受容と伽藍の創建」 『季刊考古学』 34 1991.02
- 「南都六宗の再検討」 『日本律令制論集』 上 笹山晴生先生還暦記念会編 吉川弘文館
 1993.09
- 木南 健
- 「行基とその集団の社会活動について－ 49 院を中心とする行基の社会活動－」 『龍谷
 大学仏教史研究』 25-26
- 木下 資一
- 「高山寺本『比良山古人靈託』－解題と翻刻－」 『教育学部紀要』 35 富山大学教育学
 部 1987.02
- 「『行基菩薩遺誠』考・補遺 行基参宮伝承の周辺」 『論集』 41 神戸大学教養学部
 1988.03
- 君津市文化財センター
- 『東郷台遺跡(川原井廃寺)』 君津市文化財センター発掘調査報告書 17 君津市文化財
 センター(千葉) 1986.03
- 木村 武夫
- 「東大寺大仏造営をめぐる 2、3 の問題」 『末永先生米寿記念献呈論文集』 坤 末永先
 生米寿記念会編 奈良明新社 1985.06
- 木村 衡
- 「古代の地方山林寺院について」 『民衆宗教の構造と系譜』 圭室文雄編 雄山閣出版

1995.04

木本 秀樹

「立山開山縁起」にみえる布施院について－その史料学的解釈に関する覚書－ 『研究紀要』2 富山県立山博物館 1995.03

木本 元治

「善光寺・黒木田遺跡及び宮沢窯跡群出土の飛鳥時代の瓦 東北地方への仏教伝播期の様相について」 『福大史学』46.47 福島大学 1989.02

九州古文化研究会

「豊前地方の古代寺院と古瓦」 『古文化談叢』34 1995.05

京都市文化観光局文化財保護課

『京の古代社寺－京都の式内社と古代寺院』 京都市文化観光局文化財保護課 1994.12

京都市埋蔵文化財研究所

『北野廃寺発掘調査概報』 昭和61年度 京都市文化観光局 1987.03

清輔 道生

「八幡神教と良弁：東大寺大仏造立秘史」 『豊日史学』55-3 豊日史学会 1991.02

清武 雄二

「ヤマト王権の仏教受容と外交政策」 『大学院紀要－文学研究科』27 国学院大学 1996.03

霧林 宏道

『日本靈異記』の編纂背景とその意図 『国学院雑誌』90-2 国学院大学 1989.02

『日本靈異記』から『三宝絵』へ－その伝承経路の一考察－ 『国学院雑誌』91-10 国学院大学 1990.10

『日本靈異記』における遠隔地説話の研究－伝播者を中心として－ 『国学院雑誌』96-6 国学院大学 1995.06

金田 章裕

「阿波国東大寺領荘園図の成立とその機能」 『律令国家の地方支配』 虎尾俊哉編 吉川弘文館 1995.07

草津市教育委員会社会教育課

『花摘寺廃寺発掘調査報告書』 草津市教育委員会(滋賀) 1985.03

櫛木 謙周

「平安初期の寺院と技術者－三嶋鳴継の足跡を中心に－」 『古代の日本と東アジア』

上田正昭編 小学館 1991.05

「越前c越前国坂井郡高串村東大寺大修多羅供分田地図」 『日本古代荘園図』 金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編 東京大学出版会 1996.02

櫛原 功一

「甲斐国分寺瓦の変遷」 『研究報告』4 帝京大学山梨文化財研究所 1992.07

葛原 克人

「備中秦氏の造寺活動について」 『日本古代国家の展開』下 門脇禎二編 思文閣出版 1995.11

葛本 一雄

- 「律令と仏教戒律「姪」と「非法立制」をめぐる墮落への一考察」 『法学の諸問題』
故金沢尚淑博士追悼論文集 故金沢尚淑博士追悼論文集編集委員会編 大阪経済法科大学
出版部 1987.10
- 国東歴史民俗資料館
『国指定史跡豊後国分寺跡環境整備事業報告集』 大分市教育委員会 1992.03
- 国立市遺跡調査団
『国立市文化財調査報告』30(南養寺遺跡 調査報告 7) 国立市教育委員会・国立市遺
跡調査会(東京) 1990.03
- 國平 健三
「奈良時代寺院成立の一端について(1)－相模国鎌倉郡の古瓦を中心として－」(他) 『神
奈川考古』24 1988.04
- 久野 健
「夏見廃寺趾出土の供仏」 『東アジアと日本』 田村圓澄先生古稀記念会編 吉川弘文
館 1987.12
「深大寺の金銅釈迦如来倚像について」 『史迹と美術』66-6 1996.07
- 久保 智康
「北陸の山岳寺院」1.2 『考古学ジャーナル』382.426 1994.11～98.01
- 熊谷 保孝
「仏教の受容をめぐる物部氏の立場」 『政治経済史学』300 1991.06
- 熊倉 千鶴子
『「靈異記」における僧侶の呼称』 『日本靈異記の原像』 平野邦雄編 角川書店 1991.07
- 蔵中 しのぶ
「『延暦僧録』注釈(1)影印校本篇」 『紀要－人文科学』30 大東文化大学 1992.03
「『延暦僧録』注釈(2)解題篇」 『紀要』23 池坊短期大学 1993.03
「『延暦僧録』天皇菩薩伝と護国經典」 『東洋研究』108 大東文化大学 19 93.08
「『南天竺婆羅門僧正碑并序』と入竺求法高僧伝－『梁高僧正』「訳経篇」の受容と大安
寺の華嚴教学－」 『東洋研究』112 大東文化大学 1994.08
「『延暦僧録』注釈」3.4 注釈篇 1.2 高僧沙門釈道健伝 『紀要』24.25 池坊短期大学
1994.03～95.03
「わが国初期僧伝の基盤－『梁高僧伝』「論」「贊」の受容と大安寺－」 『東洋研究』116
大東文化大学 1995.08
「奈良朝漢詩文における玄奘三蔵伝の受容について－長安西明寺と漢文伝述作の場・大
安寺－」 『東洋研究』120 大東文化大学 1996.07
- 栗田 勝弘
「国東六郷山寺院の伽藍配置と経塚」 『古文化談叢』37 1997.01
- ポール・グローナー
「奈良時代末期及び平安時代初期の尼僧受戒の変容」(庄山則子訳) 『ジェンダーの日
本史』上 東京大学出版会 1994.11
- 黒坂 周平
「元善光寺と東山道」上.下 『伊那』758.760(39-7.9) 1991.07～09

黒澤 彰哉

- 「常陸における古代寺院の造瓦活動について 茨城廃寺と上佐谷瓦窯跡群の屋瓦を中心として」『考古学叢考』中 斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編 吉川弘文館 1988.10
「常陸の古代山岳寺院 高倉廃寺を中心にして」『茨城県立歴史館報』19 1992.03
「東国の古代山岳寺院」『考古学ジャーナル』426 1998.01

黒沢 幸三

- 「良弁杉説話と大仏鑄造」『歴史における政治と民衆』北山茂夫追悼日本史学論集 日本史論叢会編・刊 1986.01
『日本靈異記 土着と外来』三弥井選書 (編) 三弥井書店 1986.06

黒瀬 之恵

- 「豊浦寺と「元興寺伽藍縁起并流記資材帳」」『古代史研究』11 1992.11

黒田 慶一

- 「住道寺跡出土の瓦一特に五輪塔文押捺瓦を中心として」『大阪の歴史』41 大阪市史編纂所 1994.03

桑原 滋郎

- 「宮城県内の古代寺院跡について」『中新田町史研究』2 1990.01

群馬県教育委員会文化財保護課

- 『史跡上野国分寺跡発掘調査概要』8 群馬県教育委員会 1988.03

小泉 賢子

- 「薬師寺光背をめぐる2、3の問題」『美術史研究』31 早稲田大学 1993.12

小泉 道

- 「契沖の「日本靈異記」の研究」『研究紀要』26 光華女子大学 1988.12
『日本靈異記諸本の研究』清文堂出版 1989.06
「日本靈異記と続日本紀」『萬葉』144 萬葉学会 1992.09
「日本靈異記の出典・享受」『靈異記 氏文 縁起』古代文学講座11 勉誠社 1995.06

幸田 顕

- 「イコノグラフィー(図像学)における飛鳥仏と天平仏の比較分類」『研究報告』25 新潟青陵女子短期大学 1995.03

香山遺跡発掘調査団

- 『香山 縄文遺跡と古代寺院跡』新宮町文化財調査報告7 新宮町教育委員会(兵庫) 1987.03

国分寺市遺跡調査団

- 『武蔵国分寺跡発掘調査概報』10～ 国分寺市遺跡調査会(東京) 1987.03～

湖西市教育委員会

- 『大知波峠廃寺跡』4(平成4年度) 湖西市文化財調査報告書31 湖西市教育委員会(静岡) 1993.03

後藤 昭雄

- 『延暦僧録』「淡海居士伝」佚文考 『日本歴史』510 1990.11

後藤 宗俊

- 「僧法蓮考 宇佐地方初期仏教ノート」2 『大分県地方史』133 1989.03

- 「沙門法蓮についての覚書」 『大分県地方史』 161 1996.03
- 小林 栄
「古代日本仏教における「教職(僧侶-尼僧)制度」の成立と変遷」 1 『神学研究』 35
関西学院大学神学研究会 1987.10
- 小林 茂文
「民衆宗教運動としての行基問題」 『民衆史研究』 34 1987.11
- 小林 昌一
「中部山岳信仰と諏訪の神」 『新版 古代の日本』 7(中部) 小林達雄・原秀三郎編
角川書店 1993.01
- 小林 忠雄
「都市空間の原初形態-山岳寺院の構造と広場性-」 『研究報告』 67 国立歴史民俗博
物館 1996.03
- 小林 真由美
「東大寺諷誦文稿の成立年代について」 『国語国文』 60-9 1991.09
「「日本霊異記」中巻第七縁考」 『成城国文学』 8 1992.03
- 小松 英雄
「法隆寺金堂薬師仏造像銘札記」 『愛媛大学法文学部愛文』 28 1993.01
- 小松崎 勇
「東大寺薬師院と「薬師庄院」-早稲田大学図書館所蔵「薬師院文書」を中心に-」
『研究と資料』 2 上智大学文学部史歌会 1987.03
- 小山 雅人
「丹波綾中麿寺の創建年代」 『京都府埋蔵文化財論集』 1 1987.01
- 小山 満
「法隆寺金堂四大壁画の典拠」 『創大アジア研究』 7 創価大学アジア研究所 1986.03
- 近藤 毅大
「8世紀における「所」と令外官司-奉写御執経所と奉写一切経司の検討から-」 『史
学雑誌』 106-3 1997.03
- 埼玉県立歴史資料館
『瓦塔・瓦堂解体修復報告書 埼玉県児玉郡美里町東山遺跡出土』 埼玉県教育委員会
1993.03
- 斎藤 圓真
「延暦僧録に見られる菩薩と居士-芸亭居士を遶って-」 『天台学報』 27 天台学会
1985.11
「石上宅嗣と最澄の奴婢解放観について」 『印度学仏教学研究』 35-1 1986.12
「思託の菩薩-居士観」 『天台学報』 29 天台学会 1987.10
「日本上代に於ける菩薩と居士-『延暦僧録』を中心として-」 『総合仏教研究所年
報』 10 大正大学総合仏教研究所 1988.03
「古代日本における居士について」 『天台学報』 30 天台学会 1988.10
- 斎藤 孝
「日本古代三金堂制伽藍淵源試論-ことに中国石窟寺院との関連-」 『文化史論叢』 上

- 横田健一先生古稀記念会編 創元社 1987.03
- 佐伯 昌紀
「奈良時代諸寺三綱等在任者表」 『寺院史研究』3 寺院史研究会 1993.03
「寺家知事考－奈良時代三綱制の一考察－」 『寺院史研究』4 寺院史研究会 1994.10
- 酒井 清治
「武蔵国分寺創建期の瓦と須恵器」 『埼玉考古』26 1989.03
- 坂井 秀弥
「上越市今池遺跡国府説・本長者原廃寺国分寺説の現状」 『新潟考古学談話会会報』11 1993.06
- 嗟峨井 建
「神宮寺の神祇奉齋－神仏習合の源流を求めて－」 『神道宗教』131 1988.06
- 柴原 永遠男
「天平宝字8年における御願大般若経の書写 藤原仲麻呂の乱と関連して」 『律令制社会の成立と展開』 亀田隆之先生還暦記念会編 吉川弘文館 1989.12
「藤原光明子と大般若経書写－「写経料紙帳」について－」 『古代の日本と東アジア』 上田正昭編 小学館 1991.05
「称徳・道鏡政権の政権構想」 『追手門経済論集』27-1 1992.04
「天平六年の聖武天皇発願一切経－写経司と写一切経司－」 『続日本紀の時代』 塙書房 1994.12
「その後の百部最勝王経」 『古代史研究』13 立教大学 1995.05
「北大家写経所と藤原北夫人発願一切経」 『律令国家の政務と儀礼』 虎尾俊哉編 吉川弘文館 1995.07
「内裏における勸経事業－景雲経と奉写御執経所・奉写一切経司－」 『日本古代国家の展開』下 門脇禎二編 思文閣出版 1995.11
「写御書所と奉写御執経所」 『続日本紀研究』300 1996.03
「図書寮一切経の変遷」 『大阪市立大学人文研究』48-12(史学) 1996.12
- 坂上 早魚
「日本・唐・新羅における授戒制度について」 『史論』44 東京女子大学歴史研究室 1991.03
- 榑 泰純
「行基の和歌とその伝承」 『研究紀要－仏教学部・文学部』72 大正大学 1986.10
- 坂詰 秀一
「山岳寺院の諸問題」 『古代世界の諸相』 角田文衛先生傘寿記念会編 晃洋書房 1993.09
「考古学と信仰」 『考古学』59 1997.05
- 坂野 和信
「日本仏教導入期の特質と東国社会－その歴史的背景と変革について－」 『埼玉考古』33 1997.07
- 相模国分寺遺跡調査会
『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書』1 相模国分尼寺跡(推定中門・金堂跡)の調

- 査 相模国分尼寺跡の調査 海老名市教育委員会(神奈川県) 1989.03 ~ 92.03
『相模国分寺関連遺跡』1.2 海老名市教育委員会(神奈川県) 1990.03 ~ 08
- 鷲森 浩幸
「奈良時代の僧綱の展開－官司機構との関係における－」 『日本史研究』294 1987.02
「玄奘發願法華經・法華撰釈の書写について」 『続日本紀研究』255 1988.01
「奈良時代における寺院造営と僧 東大寺・石山寺造営を中心に」 『ヒストリア』121 1988.12
「僧尼令における三綱」 『南都仏教』63 1989.12
「天平宝字6年石山寺造営における人事システム－律令性官司の一側面－」 『日本史研究』354 1992.02
「8世紀における寺院の所領とその認定」 『史学雑誌』104-11 1995.11
「8世紀の法華寺とそれをめぐる人びと」 『正倉院文書研究』4 1996.11
- 佐久間 竜
「護命について」 『東アジアと日本 宗教・文学編』 田村圓澄先生古稀記念会編 吉川弘文館 1987.12
「奈良仏教への一視点－戒律と受戒－」 『国語国文』43 東海学園女子短期大学 1993.03
- 桜井 信也
「評・群衛隣接寺院について」 『尋源』37 大谷大学 1987.10
『続日本紀』靈龜2年5月庚寅条の詔とその施行 『日本史における社会と宗教』 文栄堂書店 1991.02
「「寺院併合令」をめぐると、三の問題」 『古代世界の諸相』 角田文衛先生傘寿記念会編 晃洋書房 1993.09
「志賀山寺の『官寺』化と仏事法会」 『日本書紀研究』20 塙書房 1996.10
- 桜井 敏雄
「元興寺極楽坊五重小塔の設計計画－設計計画史の基礎的研究－」 『理工学部研究報告』22 近畿大学理工学部 1986.09
- 佐々木 教子
「高橋虫麻呂の官僚意識と筑波山信仰」 『二松』6 二松学舎大学大学院文学研究科 1992.03
- 佐々木 英夫
「平安時代前期彫刻史への視点－文化史の立場から－」 『瓜生』9 京都芸術短期大学 1986.12
- 笹生 衛
「村落内寺院」における堂宇建物と仏教信仰 『野中徹先生還暦記念論集』 野中徹先生還暦祝賀会 1993.03
「古代仏教信仰の一側面－房総における8・9世紀の事例を中心に－」 『古代文化』46-12 1994.12
- 佐竹 真由美
「元興寺之僧自嘆歌1首」 『成城国文学』5 成城大学成城国文学会 1989.03
- 佐藤 長門

- 「称徳・道鏡政権下の写経体制」 『正倉院文書研究』1 1993.11
- 佐藤 文子
「優婆塞貢進の実像とその史的意義」 『史窓』50 京都女子大学 1993.03
- 佐藤 正英
「日本書紀における仏教伝來說話をめぐって」 『日本思想史学』20 1988.09
- 佐藤 みち子
「行基の「大仏勸進」について」 『歴史評論』472 1989.08
- 佐原 作美
「日本靈異記における蘇生譚の構造」 『東洋学論集』 中村璋八先生古稀記念 汲古書院 1996.01
- 猿田 知之
「南都仏教の語学的研究について(上)善珠を中心として」 『研究紀要』33 シオン短期大学 1993.12
「願文と議文—八世紀を中心として—」 『研究紀要』36 シオン短期大学 1996.12
- 沢田 むつ代
「法隆寺献納宝物—染織幡四流 重要資料緊急修理(昭和60年度)を終えて」
『MUSEUM』429.435 東京国立博物館 1986.12～87.06
「法隆寺献納宝物—染織幡五流 重要資料緊急修理(昭和62年度)を終えて」
『MUSEUM』446 東京国立博物館 1988.05
「法隆寺献納宝物—平絹幡二流と幡足六条 重要資料緊急修理(平成2年度)を終えて」
『MUSEUM』483 東京国立博物館 1991.06
「藤ノ木古墳出土の綾と法隆寺の綾」 『考古学雑誌』81-3 1996.03
- 椎野 禎文
「天香山—その表記と名義—」 『東アジアの古代文化』83 1995.05
- 滋賀県教育委員会
『穴太廃寺』 滋賀県教育委員会、大津市教育委員会 1987
『法養寺遺跡発掘調査報告書』 犬上郡甲良町 滋賀県教育委員会 1984.03
- 四天王寺文化財管理室
『東円寺跡発掘調査概要報告書 国道170号線建設に伴う発掘調査』1.2 大阪府教育委員会 1983.03～84.03
- 篠原 祐一
「下野国分寺創建期の状況」(他) 『月刊考古学ジャーナル』318 1990.05
- 柴 三九男
「斑鳩寺はいつ再建されたか」 『短大論叢』80.81 関東学院女子短期大学 1989.02
- 渋川市教育委員会社会教育課
『有馬廃寺跡発掘調査概報』 渋川市発掘調査報告書14 渋川市教育委員会(群馬) 1987.03
- 島田 清
「溝口廃寺」 『紀要』15 姫路学院女子短期大学 1987.12
- 島津 現淳

- 『六要鈔』所引の智光の『無量寿経論釈』について 『同朋仏教』 20.21 同朋大学
 教学会 1986.05
- 清水 みき
 「行基集団と山崎院の造作—人名文字瓦の検討より—」 『続日本紀の時代』 塙書房
 1994.12
- 清水 宣義
 「能登国分寺出土の瓦塔について」 『学葉』 31 金沢女子短期大学 1989.12
- 下出 積與
 『古代日本の庶民と信仰』 弘文堂 1988.05
 「律令貴族層における仏教の位置—いわゆる万葉時代を中心として—」 『駿台史学』 75
 明治大学駿台史学会 1989.01
 『日本古代の人と文化』(編) 高科書店 1993
- 白井 優子
 「平安時代初期における地方弘法について」 『古代寺院と仏教』 鶴岡静夫編 名著出
 版 1989.04
 「平安時代初頭の仏教と女性」 『尼と尼寺』 平凡社 1989.08
- 白石 成二
 「伊予国の古代仏教—渡来系氏族をめぐって」 『ソーシャル・リサーチ』 13 ソーシア
 ル・リサーチ研究会 1987.03
- 白石 ひろ子
 『『靈異記』からみた遠距離交易』 『日本靈異記の原像』 平野邦雄編 角川書店 1991.07
- 神 英雄
 「古代陸奥国における『官寺』と『私寺』—城柵・官衙「付属寺院」説の再検討—」 『紀
 要』 27 龍谷大学仏教文化研究所 1989.02
- 新川 登亀男
 「法隆寺幡銘管見」 『東アジアと日本 宗教・文学編』 田村圓澄先生古稀記念会編
 吉川弘文館 1987.12
 「新羅進調の思想像—「諸珍財」の飛鳥大仏献納—」 『日本史研究』 333 1990.05
 「新羅における立太子—新羅の調と別献物(2)—」 『古代国家の歴史と伝承』 黛弘道編
 吉川弘文館 1992.03
 『『那須国造碑』と仏教』 『日本歴史』 532 1992.09
- 末木 健
 「甲斐白鳳時代寺院の—様相—敷島町天狗沢窯址発見鏡瓦について」 『考古学雑誌』 72-3
 1987.02
- 末木 文美士
 「奈良時代の禅」 『禅文化研究所紀要』 15 花園大学 1988.12
 「日本法相宗の形成」 『仏教学』 32 1992.03
- 菅原 征子
 「養老の隼人の反乱と宇佐仏教徒」 『日本歴史』 493 1989.06
 「宇佐八幡の仏教的性格について」 『仏教史学研究』 33-1 仏教史学会 1990.07

杉山 二郎

『大仏以後』 学生社 1987.01

「謎多き天平僧の実像」 『大法輪』 54-1 大法輪閣 1987.01

「大仏建立の謎に思う」 『大法輪』 55-6 大法輪閣 1988.06

杉山 信三

「室生寺五重塔私考」 『史跡と美術』 59-3 1989.03

鈴鹿市教育委員会

『伊勢国分寺跡－発掘調査概要報告第2次』 鈴鹿市教育委員会(三重) 1990.03

『伊勢国分寺跡－発掘調査概要報告第3次』 鈴鹿市教育委員会(三重) 1991.03

『伊勢国分寺跡－尼寺跡推定地の調査』 鈴鹿市教育委員会(三重) 1992.03

『伊勢国分寺跡(5次)・長者屋敷遺跡(1次)－発掘調査概要報告』 鈴鹿市教育委員会(三重) 1993.03

『伊勢国分寺・国府跡』 2.3 鈴鹿市教育委員会(三重) 1995.03～96.03

鈴木 嘉吉

「法隆寺新再建論」 『文化財論叢』 II 同朋舎出版 1995.09

鈴木 景二

「聖武天皇勅書銅板と東大寺」 『奈良史学』 5 奈良大学史学会 1987.12

「播磨清水寺所蔵の天平写経 新出の大字法華経巻第5」 『MUSEUM』 484 東京国立博物館 1991.07

「正倉院文書続修第1巻の聖武太上天皇願文 聖武天皇勅書銅板関連文書」 『奈良古代史論集』 2 奈良古代史談話会 1991.11

「都鄙間交通と在地秩序－奈良・平安初期の仏教を素材として－」 『日本史研究』 379 1994.03

鈴木 慎一

「八・九世紀の「本寺」について－僧尼名籍考察の一視点－」 『寺院史研究』 3 1993.03

鈴木 久男

「北野麿寺瓦窯について」 『歴史考古学を考える』 1 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1987.12

鈴木 麻里子

『『続日本紀』神亀5年11月3日条にみえる「山房」について』 『続日本紀研究』 289 1994.02

須田 勝嶺仁

「古代の当麻氏族と宗教」 『紀要』 38 大谷女子短期大学 1994.12

須田 茂

「台之原麿寺の瓦について」 『藪塚本町埋蔵文化財調査報告書 7 台之原麿寺跡 II』 藪塚本町教育委員会(群馬) 1986.03

須田 勉

「創建期国分寺の造営過程」 『月刊考古学ジャーナル』 318 1990.05

「造寺のひろがり」 『季刊考古学』 34 雄山閣出版 1991.02

「武蔵国分寺の造営」 『考古学ジャーナル』 364 1993.09

- 「下野薬師寺の伽藍と受戒施設－奈良時代前半における受戒の可能性をめぐって－」
『宗教・民衆・伝統－社会の歴史的構造と変容－』 地方史研究協議会編 雄山閣出版
1995.09
- 「古代寺院の経済活動－関東のいくつかの寺を中心として－」 『国史館史学』4 1996.03
- 「瓦」 『考古学雑誌』82-3 1997.01
- 「関東・東北の古墳と寺院」 『考古学』60 1997.08
- 須田 春子
「奈良仏教を支えた中堅・民衆女性」 『古代文化史論攷』12 奈良・平安文化史研究会
1993.03
- 関口正之
「法華堂根本曼陀羅/ボストン美術館蔵」 『国華』1128 朝日新聞社 1989.11
- 脊古 真哉
「律令国家と伊勢神宮 天武朝より聖武朝に至る」 『行動と文化』12 行動と文化研究会
1987.08
- 「初期の神仏交渉について－多度神宮寺伽藍縁起并資財帳をめぐって－」 『東海仏教』35
東海印度学仏教学会 1990.02
- 関根 淳
「藤原仲麻呂と安都雄足－岡寺をめぐる考察－」 『続日本紀研究』304 1996.10
- 関根 俊一
「奈良朝密教法具試考－古代三鈷杵をめぐって」 『日本文化史研究』23 帝塚山短期大
学 1995.07
- 千田 稔
『天平の僧行基』 中央公論社 1994
「仏教の受容と古代国家」 『日本古代国家の成立を探る』3 泉南市 1995.11
泉南市教育委員会
『海会寺』 海会寺遺跡発掘調査報告書 泉南市教育委員会(大阪) 1987.09
- 前場 幸治
『古瓦考－相模国分寺千代台廃寺』 冬青社 1993.09
- 副島 弘道
「新薬師寺地蔵菩薩像修理研究報告」(他) 『美術学部紀要』21 東京芸術大学 1986.03
- 曾我部 順子
「『日本霊異記』の一考察－現報のあらわれ方について－」 『女子大國文』101 京都女
子大学国文学会 1987.06
- 曾根 正人
『神々と奈良仏教』(編) 論集奈良仏教4 雄山閣出版 1995.02
- 菌田 香融
「東アジアにおける仏教の伝来と受容－日本仏教の伝来とその史的前提－」 『東西学術
研究所紀要』22 関西大学東西学術研究所 1989.03
「古代寺院跡と瓦葺駅家－『兵庫県史』仏教史関係補遺(1)」 『兵庫県の歴史』32 1996.02
太子町立竹内街道歴史資料館

- 『二上山麓の古代寺院』 1995.09
- 高井 佳弘
「台之原廃寺の瓦について」 『藪塚本町埋蔵文化財調査報告書 7 台之原廃寺跡 II』
藪塚本町教育委員会(群馬) 1986.03
- 高崎 謙治
「東北アジアの古代律令国家の経済交易と宗教的交流の諸相に関する序説的一考察—シルクロードの終着点「正倉院」に集積された「国家珍宝」と大和朝廷の成立を象徴する仏寺—仏像の東漸の系譜—」 『いわき紀要』11 いわき短期大学 1986.01
- 高瀬 重雄
『古代山岳信仰の史的考察』 高瀬重雄文化史論集 3 名著出版 1989.08
「泰澄大師をめぐる伝承の考察」 『富山史壇』116 越中史壇会 1995.03
- 高田 良信
「百済観音像の伝来と名称起源の考察」 『東アジアと日本』 田村圓澄先生古稀記念会
編 吉川弘文館 1987.12
「法隆寺昭和資材帳の成果」 『季刊考古学』34 雄山閣出版 1991.02
『法隆寺建立の謎 聖徳太子と藤ノ木古墳』 春秋社 1993.06
- 高梨 純二
「滋賀・鶏足寺木心乾漆造十二神像について」 『MUSEUM』437 東京国立博物館
1987.08
- 高野 晋司
「壱岐嶋分寺」 『考古学ジャーナル』376 ニューサイエンス 1994.06
- 高橋 章
「筑前・豊後国分寺」 『考古学ジャーナル』318 ニューサイエンス 1990.05
- 高橋 一夫
「東国の中の武蔵古代寺院」 『渡来人と仏教信仰』 柳田敏司・森田悌編 雄山閣出版
1994.06
「荒川北岸の古代寺院」 『渡来人と仏教信仰』 柳田敏司・森田悌編 雄山閣出版
1994.06
「入間・比企の古代寺院」 『渡来人と仏教信仰』 柳田敏司・森田悌編 雄山閣出版
1994.06
- 高橋 伸幸
「当麻寺創建説話の展開」 『女子短期大学部紀要』9 札幌大学 1987.02
- 高松市教育委員会
『弘福寺領讃岐国山田郡田岡比定地域発掘調査概報』1～3 高松市教育委員会(香川)
1988.03～90.03
『讃岐国弘福寺領の調査—弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書』 高松市教育委員会(香
川) 1992.03
- 高松町教育委員会
『寺家遺跡調査報告書—第10次』 羽咋市教育委員会(石川) 1993.03
- 高山市教育委員会

- 『飛騨国分尼寺跡発掘調査報告書』 高山市埋蔵文化財調査報告書 17 高山市教育委員会(岐阜) 1990.03
- 瀧音 能之
「古代出雲の仏教研究」 『出雲古代史研究』 3 1993.07
- 瀧田 寿陽
「下野薬師寺建立の背景」 『関東の古代社会』 遠藤元男編 名著出版 1989.06
- 瀧浪 貞子
「大仏造立への道程—聖武天皇の「衍皇 5 年」—」 『研究紀要』 3 京都女子大学宗教文化研究所 1990.03
- 竹居 明男
『扶桑略記』 裡書私見(覚書) 『国書逸文研究』 19 1987.06
「わが国宮廷における仏事に関する編年史料—六国史による—」 『人文学』 148 同志社大学 1990.03
『日本古代仏教の文化史』 吉川弘文館 1998.05
- 竹内 英昭
「伊勢地方における官系瓦の分布—奈良時代後半期の軒丸瓦の様相—」 『斎宮歴史博物館研究紀要』 2 1993.03
- 竹下 正博
「肥前小城三岳寺の薬師・大日・十一面観音像」 『MUSEUM』 542 東京国立博物館 1996.08
- 武田 賢寿
「聖徳太子における一大乗仏教とその実践」 『同朋仏教』 20.21 同朋大学仏教学会 1986.05
「聖徳太子における篤敬三宝と国家統一」 『紀要』 7.8 同朋大学仏教文化研究所 1986.07
「奈良時代における太子信仰の形成—法華信仰から浄土信仰へ—」 『紀要』 10 同朋大学仏教文化研究所 1989.01
- 田崎 篤朗
『日本靈異記』 に見られる末法観と浄土信仰 『季刊日本思想史』 40 1993.01
「古代にみられる中国文化への憧憬と自土意識—『日本靈異記』 における地獄観の成立をめぐって—」 『季刊日本思想史』 44 1994.10
- 多田 伊織
「アジアの中の『日本靈異記』」 『宗教研究』 69-4(307) 1996.03
- 多田 一臣
「撰者としての景戒」 『靈異記 氏文 縁起』 古代文学講座 11 勉誠社 1995.06
- 巽 淳一郎
「頭塔の構造とその源流」 『季刊考古学』 34 雄山閣出版 1991.02
- 舘江 順子
『日本靈異記』 にみえる日付と古代の暦知識 『日本靈異記の原像』 平野邦雄編 角川書店 1991.07
- 舘野 和己

- 「相模国調邸と東大寺領東市庄」 『歴史と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集 高井悌三郎先生喜寿記念事業会編 真陽社 1988.01
- 田中 彰
「『日本書紀』に見える寺名の問題 飛鳥寺を中心に」 『京都府埋蔵文化財論集』1 1987.01
- 田中 英道
「大仏師国中連公麻呂の作品の様式的認定」 『文学部研究年報』41 東北大学文学部 1992.03
- 田中 元
「日本における仏教受容について」 『東洋学術研究』29-4 東洋哲学研究所 1990.12
- 田中 嗣人
「薬師寺東院堂聖観音像造立考」 『日本書紀研究』16 塙書房 1987.12
「経師考 博物館前史解明の一助として」 『博物館学年報』23 同志社大学 1991.12
「法隆寺と止利仏師」 『華頂博物館学研究』1 1994.12
「元興寺の僧道昭宇治橋を架けるか」 『華頂博物館学研究』2 1995.12
- 田中 日佐夫
『仏像のある風景』 駸々堂出版 1989.07
「史的に見た日本人の神話イメージ・古代史イメージ」 『日本古代の伝承と東アジア』佐伯有清先生古稀記念会編 吉川弘文館 1995.03
- 田中 恵
「大安寺釈迦像の周辺(1～2)日本仏像彫刻における「宗教造形」と「信仰造形」について」 『教育学部研究年報』54-3.55-2 岩手大学 1995.03
- 田辺 三郎助
「十一面観音像/奈良国立博物館蔵」 『国華』1127 朝日新聞社 1989.10
- 田辺 征夫
「瓦積基壇と渡来系氏族」 『考古学』60 1997.08
- 谷 豊信
「仏教伝来と蓮華紋瓦当」 『アジアからみた古代日本』 新版古代の日本 2 角川書店 1992.05
- 田村 圓澄
『日本古代の宗教と思想』 山喜房仏書林 1987.10
「聖徳太子と仏教」 『東アジアの古代文化』54 1988.01
「東大寺大仏参拝団の来日」 『日本歴史』483 1988.08
「行基とその時代」 『在家仏教』451 1990.01
「伝教大師と弘法大師」 『在家仏教』462 1990.12
「宇佐八幡の仏教帰依」 『長岡京古文化論叢』2 三星出版 1992.07
『飛鳥・白鳳仏教史』上.下 吉川弘文館 1994.02
『図説日本仏教の歴史 飛鳥・奈良時代』 佼成出版社 1996.09
- 田村 晃祐
『徳一論叢』(編) 国書刊行会 1986.12
- 千歳 竜彦

- 「説話と史実の間—『日本霊異記』の場合—」 『史泉』75 関西大学史学・地理学会
1992.03
千葉 正
- 「日本密教における本尊観の変遷」 『仏教学研究年報』29 駒沢大学 1996.05
千葉県文化財センター
- 『下総国分尼寺跡』調査報告 4(昭和 60 年度) 市川市立市川考古博物館(千葉) 1986.03
塚口 義信
- 「百済大寺に関する基礎的考察」 『日本書紀研究』18 塙書房 1992.05
遠 日出典
- 「坂上氏と知行の寺社—清水寺創建の背景—」 『研究紀要』24 京都精華学園 1986.11
- 「清水寺縁起考 寺院史的立場より」 『研究紀要』25 京都精華学園 1987.11
- 「龍蓋寺(岡寺)草創考」 『研究紀要』27 京都精華学園 1989.11
- 「神仏習合の素地形成と発生期の諸現象 既存発生論への再検討を踏まえて」 『芸林』
40-4 芸林会 1991.11
- 「宇佐神宮弥勒寺址小考」 『博物館学年報』23 同志社大学 1991.12
- 「宇佐に於ける原初信仰」 『神道史研究』40-4 1992.10
- 「八幡神宮寺の成立」 『神道史研究』42-1 1994.01
- 「八幡神の大安寺・薬師寺への勧請」 『芸林』43-4 芸林会 1994.11
- 「八幡神顕現伝承考—その系統と変遷を中心に」 『神道史研究』43-4 1995.10
- 辻本 和美
- 「地方における仏教受容の一側面 郡司層と寺院建立について」 『京都府埋蔵文化財論
集』1 1987.01
- 津田 勉
- 「大仏造立と八幡産銅神説について」 『國學院雑誌』99-5 1998.05
- 土田 充義
- 「宇佐弥勒寺の伽藍と堂塔の復元」 『東アジアと日本』 田村圓澄先生古稀記念会編
吉川弘文館 1987.12
- 土山 公仁
- 「東海 of 古墳と寺院」 『考古学』60 1997.08
- 角田 文衛
- 『新修国分寺の研究』(編) 吉川弘文館 1991.05 ~ 09
- 坪之内 徹
- 「土師寺考」 『日本書紀研究』16 塙書房 1987.12
- 鶴岡 静夫
- 『関東古代寺院の研究』増訂版 弘文堂 1988.03
- 「古代寺院における所有権観念の発達」 『古代寺院と仏教』 鶴岡静夫編 名著出版
1989.04
- 出河 裕典
- 「信濃の瓦塔再考—近年の出土例を中心として—」 『信濃』47-4 信濃史学会 1995.04
帝塚山考古学研究所

- 『古代の寺を考える 年代・氏族・交流』 帝塚山考古学研究所 1991.09
- 寺川 真知夫
 『続日本紀』の宗教 『古代文学』35 1996.03
 『日本国現報善悪靈異記の研究』 和泉書院 1996.03
- 寺前 治一
 『野中寺 塔跡発掘調査報告』埋蔵文化財分布調査概報(羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 12.13) (他編) 羽曳野市教育委員会(大阪) 1986.03
- 土肥 貞之
 「役小角をめぐる歴史の深淵」 『秋田法学』8 秋田経済法科大学法学部法学会 1986.11
 「仏教公伝より修験道成立まで—『修験の道と哲学』第1部 「修験道の史的考察」第4章—」 『秋田論叢』3 秋田経済法科大学法学部 1987.03
- 土肥 富士夫
 「能登国分寺跡の整備について」 『日本歴史』523 1991.12
- 東京国立博物館
 『特別展百済観音』 法隆寺宝物献納110年 NHKサービスセンター 1988.11
- 東郷町文化財保護委員会民俗無形部門
 『三河国分寺跡—史跡三河国分寺跡伽藍・寺域の確認発掘調査報告書—』 豊川市教育委員会(愛知) 1989.03
- 東野 治之
 「法隆寺伝来の香木と古代の生薬輸入」 『和漢薬』413 和漢薬同好会 1987.10
 「古文書・古写経・木簡」 『水茎—古筆学研究』7 古筆学研究所 1989.09
 「写経生試字紙背の食口案断簡—正倉院流出文書の一例—」 『日本歴史』500 1990.01
 「歴史学と学際的研究—正倉院宝物と法隆寺献納宝物—」 『ヒストリア』150 1996.03
- 栃木県教育委員会
 『下野国分寺跡』3 昭和60年度発掘調査概報 栃木県埋蔵文化財調査報告82 栃木県教育委員会 1987.03
- 栃木県教育史編纂会
 『下野国分寺跡』1 栃木県埋蔵文化財調査報告64 栃木県教育委員会 1985.03
- 土橋 誠
 「維摩会に関する基礎的考察」 『古代史論集』下 直木孝次郎先生古稀記念会編 塙書房 1989.01
- 泊 勝美
 「朝鮮仏教と毘盧舎那仏」 『東アジアの古代文化』50 1987.01
- 富永 樹之
 「「村落内寺院」の展開(上)—地方に於ける仏教の受容—」 『神奈川考古』30 1994.05
- 内藤 亮
 「8世紀以前における伽藍の認識と実態」 『法政史論』21 法政大学 1994.03
 「古代在地における仏教施設について—概念の整理を中心として—」 『法政史論』22 法政大学 1995.03
- 直林(平野) 不退

- 「孝徳朝における十師「制度化」の背景」 『龍谷史壇』86 龍谷大学 1985.05
- 「法頭制とその始終」 『龍谷史壇』90 龍谷大学 1987.12
- 「『僧尼令』の僧綱関係条文を通じて見た仏教「制度化」」 『歴史と伝承』 日野昭博士還暦記念会編 永田文昌堂 1988.04
- 「日本古代の僧団における看病 天武8年10月是月条の勅をめぐって」 『援助的人間関係』 西光義敏編 永田文昌堂 1988.06
- 『日本古代仏教制度史研究』 永田文昌堂 1988.10
- 「日本古代の戒律受容 戒師招請をめぐる史料批判」 『印度学仏教学研究』37-1 1988.12
- 「戒律受容と貴族—『日本靈異記』の事例—」 『紀要』27 龍谷大学仏教文化研究所 1989.02
- 「戒師招請をめぐる史料的考察」 『日本の宗教と文化』平松令三古稀記念論集 平松令三古稀記念会編 同朋舎出版 1989.11
- 「天武朝の戒律受容の記載について」 『印度学仏教学研究』39-1 1990.12
- 「日本における戒律受容の始源—古代・中世の仏教史々料の検討—」 『印度学仏教学研究』40-1 1991.12
- 「鞍部氏と戒律受容」 『印度学仏教学研究』42-1 1993.12
- 「渡来系氏族仏教の一考察」 『印度学仏教学研究』43-1 1994.12
- 中井 一夫
- 「東大寺における大型銅製品の鑄造」 『考古学と自然科学』25 日本文化財科学会 1992.06
- 「東大寺戒壇院東地区の鑄造遺構」 『考古学ジャーナル』372 1994.03
- 「考古学調査から見た梵鐘鑄造技術の復元」 『梵鐘』7 古鐘研究会 1997.10
- 仲井 克己
- 「日本靈異記の世界観—仏国土に於ける救済の論理—」 『国文学研究』90 早稲田大学国文学会 1986.10
- 「罪人の心象風景—始原としての日本靈異記—」 『国史学研究』92 龍谷大学国史学研究会 1987.06
- 中井 公
- 「寺の瓦と役所の瓦」 『季刊考古学』34 雄山閣出版 1991.02
- 中井 真孝
- 「神仏習合思想の展開」 『日本古代の律令神祇祭祀の成立過程と構造の研究』 科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書 律令制研究会(代表・菊地康明) 1989.03
- 「僧尼令の法的起源—特に任僧綱条を中心にして—」 『中国史と西洋社会の展開』 新野直吉諸戸立雄両教授退官記念会編 みしま書房 1991.02
- 『日本古代仏教制度史の研究』 法蔵館 1991.06
- 『行基と古代仏教』 永田文昌堂 1991.07
- 『朝鮮と日本の古代仏教』 東方出版 1994.10
- 『奈良仏教と東アジア』(編) 論集奈良仏教5 雄山閣出版 1995.05
- 永井 智教
- 「寄居町馬騎の内麿寺採集の瓦について」(他) 『土曜考古』21 土曜考古学研究会

1997.10

中尾 純子

「室生寺金堂一板光背像について—表現形態の特異性—」 『瓜生』8 京都芸術短期大学 1985.12

「新薬師寺・薬師如来坐像について—薬師信仰の観点より—」 『瓜生』9 京都芸術短期大学 1986.12

「浄土空間の形成・当麻曼荼羅をめぐって—追善儀礼から欣求浄土へ—」 『瓜生』10 京都芸術短期大学 1987.12

中尾 良信

「聖徳太子南嶽慧思後身説の変遷」 『研究紀要』21 花園大学文学部 1990.03

長岡 龍作

「神護寺薬師如来像の位相—平安時代初期の山と薬師—」 『美術研究』359 1994.03

中川 修

「律令国家の成立と仏教」 『論集』446 龍谷大学 1995.06

長坂 一郎

「福井・大谷寺・泰澄大師像の造像をめぐって」 『MUSEUM』472 東京国立博物館 1990.07

「初期神宮寺の成立とその本尊の意味 神護寺薬師如来像の造像理由をてがかりにして」 『美術研究』354 1992.09

「平安時代前期における南都諸宗の地方寺院経営と木彫像の制作—元興寺法相宗の場合を例として—」 『仏教芸術』206 毎日新聞社 1993.01

長崎県教育委員会

『老岐嶋分寺』1 長崎県芦辺町文化財調査報告書5 芦辺町教育委員会 1991.03

中島 正

「日本霊異記と山寺」 『考古学から古典を読む』季刊考古学別冊 雄山閣出版 1993.12

「山背の古墳と寺院」 『考古学』60 1997.08

永島 祐照

「法進撰『沙弥十戒並威儀経疏』について」 『天台学報』30 天台学会 1988.10

中田 興吉

「播磨国千本屋廃寺の建立背景について」 『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集 高井悌三郎先生喜寿記念事業会編 真陽社 1988.01

「八世紀における仏教活動と神祇信仰—村落情勢との関わりにおいて—」 『政治経済史学』347 1995.05

永田 瑞

「仏典における女性観の変遷 三従・五障・八敬法の周辺」 『救いと教え』大隅和雄・西口順子編 平凡社 1989.04

中西 亨

「称徳女帝と法師道鏡私考」 『史迹と美術』66-3 1996.03

中西 真美子

「東大寺法華堂不空羼索観音像と隨身像についての一試考」 『美学論究』11 関西学院

- 大学 1997
- 中西 康裕
「『続日本紀』と道鏡事件」 『日本史研究』 369 1993.05
- 中根 勝
『百万塔陀羅尼の研究』(編) 『百万塔陀羅尼の研究』刊行委員会 八木書店 1987.02
- 中野 玄三
「神護寺薬師如来立像再論—丹波国分寺周辺の古代彫像を参照して—」 『仏教芸術』234
朝日新聞社 1997.09
- 中野 忠明
「再説 法興・元興別寺説—両寺合併論の再検討—」上.中.下 『史迹と美術』 61-1 ~ 3
1991.01 ~ 03
- 長野 一雄
「仏教説話における事実と虚構—日本靈異記を素材に—」 『国文学研究』 87 早稲田大
学国文学会 1985.10
「因果の言説—日本靈異記—」 『文学論叢』 10 徳島文理大学 1993.03
- 中野 高行
「東日本のナタ彫り仏」 『古代寺院と仏教』 鶴岡静夫編 名著出版 1989.04
「再説・神護寺薬師像の伝来と制作年代」上.下 『史迹と美術』 59-6.7 1989.07 ~ 08
- 中野 幡能
「別府と宇佐八幡」 『豊日史学』 189.190 豊日史学会 1988.03
「縁起から見た創草期宇佐の八幡宮」 『神道古典研究』 14 神道大系編纂会 1992.12
「法蓮の「野四十町」について」 『豊日史学』 57-1.2.3 豊日史学会 1993.03
「八幡神創祀をめぐる諸問題」 『豊日史学』 59-1.2.3 豊日史学会 1995.03
『宇佐宮』 吉川弘文館 1996.07
「八幡信仰の源流」 『神道宗教』 162 1996.03
『宇佐八幡宮放生会と法蓮』 岩田書院 1998.10
- 中林 隆之
「律令制的土地支配と寺家」 『日本史研究』 374 1993.10
「優婆塞(夷)貢進制度の展開」 『正倉院文書研究』 1 1993.11
「護国法会の史的展開」 『ヒストリア』 145 1994.12
- 永藤 靖
「『日本靈異記』における貨幣の機能 共同体の外から来るもの」 『文芸研究』 69 明
治大学文芸研究会 1993.02
『古代説話の変容—風土記から靈異記へ』 勉誠社 1994.06
「『日本靈異記』の仏像と祈りについて」 『文芸研究』 73 明治大学文芸研究会 1995.03
『日本靈異記の新研究』 新典社 1996.04
- 中村 生雄
「神仏習合論の再検討」 『宗教研究』 66-4(295) 1993.03
- 中村 英重
「古代氏寺考」 『民衆宗教の構造と系譜』 圭室文雄編 雄山閣出版 1995.04

中村 元

「聖徳太子と日本仏教」(他) 『東洋学術研究』24-2 東洋哲学研究所 1985.11

中村 順昭

「奉写一切経所の月借錢について」 『日本歴史』526 1992.03

永村 真

「古代・中世寺院史料の活用」 『史料館報』65 国文学史料館 1996.08

中村 浩

「四天王寺食堂跡出土古代陶・土器の再検討」 『紀要』23-1 大谷女子大学志学会
1988.09

中村 史

『日本靈異記』不孝子説話と孟蘭盆会—上巻第23縁を中心として— 『立命館文学』526
1992.01

「諸国正月齋会と大安寺釈迦悔過をめぐる説話—『日本靈異記』下巻第25縁・上巻第32
縁を中心として—」 『論究日本文学』56 立命館大学日本文学会 1992.04

『日本靈異記』下巻第38縁に於ける景戒の観音悔過体験 『論究日本文学』58 立命館
大学日本文学会 1993.05

『日本靈異記と唱導』 三弥井書店 1995.05

中山 和之

「上淀麿寺—埋もれた壁画—」 『歴史と地理』445 山川出版社 1992.09

中山 每吉

『相模国分寺志』(他) 名著出版 1985.07 復刻

名古屋市見晴台考古資料館

『尾張元興寺跡 第5次調査の概要』 名古屋市教育委員会(愛知) 1992.03

七尾市教育委員会文化課

『史跡能登国分寺跡 発掘調査報告書』 七尾市埋蔵文化財調査報告 七尾市教育委員
会(石川) 1989.03

名畑 崇

「仏教伝来と仏像の伝説—光るほとけ—」 『大谷学報』65-4 大谷大学大谷学会 1985.12

波毛 康宏

「淡路国分寺について」 『歴史と神戸』26-4 1987.08

奈良 弘元

『『日本靈異記』にみられる「風流」について』 『宗教研究』62-4 1989.02

『当麻石光寺と弥勒仏 概報 日本最古の石仏と白鳳寺院』 吉川弘文館 1992.08

『聖徳太子の時代 変革と国際化のなかで』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
1993.10

奈良国立博物館

『仏教説話の美術』 東京美術 1996.03

奈良国立文化財研究所

『飛鳥寺』 飛鳥資料館図録15 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1986.03

『薬師寺発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所学報45 1987.03

南国市教育委員会

『土佐国分寺跡』 発掘調査概報 南国市教育委員会(高知) 1988.03

南都国際仏教文化研究所

『南都大安寺論叢』(編) 大安寺 臨川書店 1995.11

南里 みち子

「靈異記の善珠の説話」 『紀要』35 福岡女子短期大学 1988.06

「靈異記の成立事情」 『語文研究』66.67 九州大学国語国文学会 1989.06

西井 芳子

「大宅寺と大宅廃寺—研究史の再検討—」 『古代世界の諸相』 角田文衛先生傘寿記念会編 晃洋書房 1993.09

西井 龍儀

「北陸の塔心礎 桂穴式を中心に」 『北陸の古代寺院』 桂書房 1987.02

西川 杏太郎

「日本古代小金銅仏の二つの鑄造法とその造型的特色」 『MUSEUM』432 東京国立博物館 1987.03

西口 順子

『女の力 古代の女性と仏教』 平凡社 1987.08

「女性と仏教」をめぐると覚え書き—「尼と尼寺」をめぐって— 『尼と尼寺』 大隅和雄・西口順子編 平凡社 1989.08

「女性の出家と受戒」 『研究紀要』5 京都女子大学宗教・文化研究所 1992.03

西田 孝司

「四天王寺の創建者をめぐると問題」 『文化史論叢』上 横田健一先生古稀記念会編 創元社 1987.03

新田 学爾

「文献に現われた弥勒信仰」 『大阪青山短大国文』6 大阪青山短期大学国文学会 1990.02

仁藤 敦史

「斑鳩宮」の経済的基盤—法隆寺資財帳よりみた— 『ヒストリア』115 1987.06

沼波 政保

「説話における因果 世俗説話を中心に」 『同朋国文』18 同朋大学国文学会 1985.03

根本 誠二

「長屋王と仏教」 『日本宗教史論纂』 下出積與編 桜楓社 1988.05

「行基伝承をめぐって 丹後国を中心に」 『駿台史学』75 明治大学駿台史学会 1989.01

「行基伝承の成立をめぐって」 『古代寺院と仏教』 鶴岡静夫編 名著出版 1989.04

「中瀬景観寺と行基」 『寒川町史研究』3 寒川町 1990.03

『奈良仏教と行基伝承の展開』 雄山閣出版 1991.06

「道鏡と飯泉観音」 『風俗』31-2 1992.11

「行基と智光」 『日本古代の人と文化』 下出積與編 高科書店 1993.08

「武蔵国の行基伝承研究ノート」 『明大商学論叢』76-1 明治大学商学部 1994.02

『奈良時代の僧侶と社会』(編) 論集奈良仏教3 雄山閣出版 1994.04

- 「武蔵国の行基伝承研究ノート」 『明大商学論叢』 76-2 一泉知永博士古稀記念号 明治大学商学部 1995.02
- 「行基と道鏡—『日本靈異記』を中心に—」 『民衆宗教の構造と系譜』 圭室文雄編 雄山閣出版 1995.04
- 「奈良仏教と『靈異記』」 『仏教史学研究』 40-2 仏教史学会 1997.12
- 寝屋川市教育委員会
『高宮麿寺発掘調査概要報告』 1～6(寝屋川市文化財資料 2～6.8) 寝屋川市教育委員会(大阪) 1980.03～1985.03
- 野瀬 文子
「大安寺縁起の成立について」 1.2 『紀要—人文・社会』 23.24 鶴見大学 1986.03～87.03
- 野田 浩子
『『日本靈異記』ノート・上巻第1縁』 『東横国文学』 24 東横学園女子短期大学 1992.03
- 野々村 安浩
「石見国出身仕丁の動向—天平宝字六年石山寺造當時における—」 『史聚』 27 駒沢大学史学会 1993.01
- 橋本 澄朗
「下野における平安時代の仏教文化の展開について—「平安仏」と「考古資料」の視点から—」 『宗教・民衆・伝統—社会の歴史的構造と変容—』 地方史研究協議会編 雄山閣出版 1995.09
- 橋本 政良
「僧尼令准格律条集解諸説の検討」 『研究報告』 33 姫路短期大学 1988.02
「明法諸家の律令学的僧尼令理解」 『研究報告』 37 姫路短期大学 1992.02
「奈良時代仏教における違法性の探求—律令的秩序の柔構造システム—」 『研究報告』 42-1 姫路短期大学 1997.02
- 橋本 義則
「『唐招提寺文書』 天之巻第1号文書「家屋資財請返解案」について」 『南都仏教』 57 1987.03
「山田寺跡出土の木簡」 『考古学ジャーナル』 339 1991.11
「大和 C 唐招提寺所蔵「観音寺領絵図」」 『日本古代荘園図』 金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編 東京大学出版会 1996.02
- 橋本 芳契
「聖徳太子と維摩仏教—大悲心と大乘—」 『紀要』 17 仁愛女子短期大学 1986.03
- 長谷川 誠
「法隆寺金堂釈迦三尊像の荘嚴意匠について」 『研究紀要』 1 駒沢女子大学 1994.10
「法隆寺献納宝物金銅光背の荘嚴意匠について」 『研究紀要』 2 駒沢女子大学 1995.12
- 八田 達男
「平安時代における山間部の寺院と浄土信仰—南山城地方の寺に対する—視点として—」 『国史学研究』 14 龍谷大学国史学研究会 1988.03
「南山城蟹満寺にみる古代寺院の歴史的展開—本尊銅造釈迦如来坐像の来歴を中心として—」 『龍谷史壇』 93.94 龍谷大学 1989.03

「蔵王権現信仰の伝播について」 『日本の宗教と文化』 平松令三古稀記念会編 同朋舎出版 1989.11

「不空羼索観音信仰の特性について—興福寺南円堂を中心に—」 『国史学研究』16 龍谷大学国史学研究会 1990.03

「架橋と造仏—主に泉橋をめぐる事項について—」 『国史学研究』18 龍谷大学国史学研究会 1992.08

「不空羼索観音信仰の特性について」 『国史学研究』16 龍谷大学国史学研究会 1992

「山岳寺院の寺地について—南山城・光明山寺の事例を中心に—」 『国史学研究』20 龍谷大学国史学研究会 1994.11

「長谷寺十一面観音像の像容について」 『仏教文化研究叢書』6 龍谷大学 1996.02

「長谷寺十一面観音像の像容について」 『日本古代の社会と宗教』 日野昭編著 永田文昌堂 1996.02

服部 良男

「法隆寺西院伽藍建築の外形規模相互関係の解析—法音としての法隆寺伽藍建築—」 『びぞん』90 美術文化史集談会 1996.02

華圓 聰磨

「日本古代の仏教信仰をめぐる正統と異端『日本靈異記』に見る靈力信仰の世界」 『正統と異端 天皇・天・神』 片野達郎編 角川書店 1991.02

花田 勝広

「律令制の確立にみる葬地の変革—河内地域の氏墓の様相を中心に—」 『信濃』40-4 1988.04

花谷 浩

「寺の瓦作りと宮の瓦作り」 『考古学研究』158 1993.09

「出土古瓦よりみた本薬師寺堂塔の造営と平城移建について」 『展望考古学』 考古学研究会 40周年記念論集 考古学研究会 1995.06

濱田 隆

「不空羼索観音序説 東大寺法華堂像を中心に」 『東アジアと日本』 田村圓澄先生古稀記念会編 吉川弘文館 1987.12

林 温

「東京国立博物館保管虚空蔵菩薩画像に関する若干の考察—八大菩薩図像と関連して—」 『MUSEUM』475 東京国立博物館 1990.10

林 健亮

「西郷郷廃寺採集資料について」 『島根考古学会誌』5 1988.05

林 博通

「寺の多い国々—近江地方—」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09

「崇福寺と金勝寺」 『考古学ジャーナル』426 1998.01

早島 鏡正

「聖徳太子の浄仏国土観」 『大倉山論集』20 1986.12

速水 侑

- 「新たな僧伝研究の必要性」 『紀要』18 中央学術研究所創立20周年記念号 1988
『奈良仏教の展開』(編) 論集奈良仏教1 雄山閣出版 1994.10
- 原田 和彦
「平安時代初期における国分寺の様相」 『史学研究集録』14 国学院大学日本史学専攻 1989.03
「千曲川流域における古代寺院—研究の前提として—」 『紀要』2 長野市立博物館 1994.03
「信濃国分寺跡をめぐる諸問題」 『信濃』48-5 1996.05
- 春名 宏昭
「百部最勝王経覚書」 『正倉院文書研究』1 1993.11
「先写一切経(再開後)について」 『正倉院文書研究』3 1995.11
- 樋口 知志
「律令制下東北辺境地域における仏教の様相—城柵下の仏教施設をめぐる—」 『国史談話会雑誌』30 東北大学国史談話会 1989.08
- 久替 成治
「飛鳥—白鳳文化と地域(備後)における造形文化」 『文化史学』43 同志社大学文化史学会 1987.11
「古代国家形成期における備後の古墳と寺院」 『紀要』14 福山市立女子短期大学 1988.03
- 菱田 哲郎
「滋賀県雪野寺跡の測量調査」(他) 『史林』70-4 1987.07
「播磨の古墳と寺院」 『考古学』60 1997.08
- 菱沼 一憲
「相模国分寺雑考」 『えびなの歴史』6 1994.08
- J.ピジョー
「聖武朝期の天皇制と東大寺」 『国学院雑誌』91-3 国学院大学 1990.03
- 秀平 文忠
『神護寺略記』所引『弘仁資財帳』について—神護寺薬師如来立像の伝来をめぐる— 『博物館年報』29 1997.12
- 日野 昭
「古代氏族と宗教」1～3 (他) 『仏教文化研究所紀要』27～28 龍谷大学仏教文化研究所 1989.02～90.12
- 姫路市教育委員会
『播磨国分尼寺跡—遺跡発掘事前総合調査概要報告』 姫路市教育委員会(兵庫) 1993.03
- 平岡 定海
「神宮寺の成立について」 『国史学論集』 今井林太郎先生喜寿記念論文集刊行会 1988.01
「行基のはなし」 『在家仏教』448 1989.10
- 平方 幸雄
「山背・大宅廃寺に関する二、三の問題」 『平安京歴史研究』 杉山信三先生米寿記念論

- 集 杉山信三先生米寿記念論集刊行会編・刊 1993.11
- 平田 寛
『奈良仏教』図説日本の仏教1 (編) 新潮社 1989
- 平野 修
「古代仏教と土地開発—山梨県内の事例から—」 『帝京大山梨文化財研究所研究報告』7
1996.10
- 平野 邦雄
『『靈異記』における牛・馬の原像』 『日本靈異記の原像』 平野邦雄編 角川書店
1991.07
- 平野 修一
「中国・日本における僧正・僧都制継受の問題」 『大学院研究紀要』8 龍谷大学大学
院 1987.03
- 昼間 孝次
「東国の初期寺院」 『考古学ジャーナル』349 1992.08
- 昼間 孝志
「武蔵国分寺と北武蔵の寺院」 『考古学ジャーナル』364 1993.09
- 広瀬 和雄
「海会寺遺跡の調査」 『日本歴史』462 1986.11
- 深澤 昌夫
「『物語』の行方—『今昔物語集』、『日本靈異記』における「乞食迫害現報譚」をめぐ
って—」 『日本文芸論稿』18.19 東北大学文芸談話会 1991.11
- 深澤 靖幸
「武蔵府中定光寺とその周辺」 『紀要』5 府中市郷土の森 1992.03
「国府のなかの多磨寺と多磨郡家」 『国史学』156 国史学会 1995.05
「武蔵国府・多磨寺・多磨郡家」 『歴史手帖』23-10 1995.10
- 福岡 猛志
「尾張元興寺と片俣里—尾張南部の交流拠点—」 『古代王権と交流 4 伊勢湾と古代の
東海』 梅村喬編 名著出版 1996.11
- 福島県立博物館
『陸奥の古瓦 瓦が語るふくしまの古代史』 福島県立博物館 1988.01
- 福住 日出雄
「中河内地方の仏教文化とその背景」(他) 『古代史の研究』10 角川書店 1995.06
- 福田 彰子
『『日本靈異記』における仏教説話としての「小ざ子話」の役割について』 『研究紀
要』4 玉木女子短期大学 1991.07
- 福山 敏男
「法隆寺五重塔秘宝奉拝調査日記」 『橿原考古学研究所論集』8 橿原考古学研究所編
吉川弘文館 1988.10
- 藤井 直正
「行基の足跡—歴史考古学の視点から—」 『論集』22 大手前女子大学 1988.12

藤井 由紀子

「「救世観音」の成立について」 『日本古代の祭祀と仏教』 佐伯有清先生古稀記念会編 吉川弘文館 1995.03

藤井寺市教育委員会事務局

『藤井寺市及びその周辺の古代寺院』上(概説編).下(本文編) 藤井寺の遺跡ガイドブック 2.3 藤井寺市教育委員会(大阪) 1987.03～10

藤沢 一夫

「畿内の寺院に見る朝鮮半島の要素」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09

富士ゼロックス小林節太郎記念基金

『憶良における儒仏道三教思想の位相』 富士ゼロックス小林節太郎記念基金 1996.03

藤田 治雄

「弥彦山系横滝山廃寺の時代」上.下 『かみくひむし』92.93 かみくひむしの会 1994.03～06

藤田 励夫

「滋賀県・長寿寺所蔵大般若波羅蜜多經の書写と伝来—平安末期地方写經の一事例として—」 『MUSEUM』530 東京国立博物館 1995.05

藤本 佳男

「悲田院とその周辺」 『歴史と伝承』 日野昭博士還暦記念会編 永田文昌堂 1988.04

「障害者差別の歴史的背景 普遍宗教としての仏教とのかかわりの中で」 『龍谷史壇』99.100 龍谷大学 1992.11

藤森 賢一

「『行基菩薩講式』—解説と翻刻—」(他) 『国語国文』15.16 高野山大学国文学会 1989.12

藤原 拓人

「『日本靈異記』に見る冥界観」 『大学院紀要』26 東洋大学文学研究科 1990.02

藤原 学

「寺の組織と運営」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09

二葉 憲香

「国家仏教の形成」 『日本仏教史論叢』 二葉憲香博士古稀記念論文集刊行会編 永田文昌堂 1986.10

「「氏神」の形成とその背景」 『同朋仏教』22 同朋大学仏教学会 1987.07

「律令仏教の基本構造の成立 政治権力と宗教的権威の合致」 『歴史と伝承』 日野昭博士還暦記念会編 永田文昌堂 1988.04

府中病院内遺跡調査団

『武蔵国分寺跡出土の漆紙文書』武蔵台遺跡 府中病院内遺跡調査会(東京) 1989.05

仏教考古学研究会

『石田茂作先生略歴並著作目録』 仏教考古学基礎資料叢刊1 仏教考古学研究会 1995.11

舟ヶ崎 正孝

- 「称徳朝下の僧位制の特質と位置づけ」 『神女大史学』4 神戸女子大学史学会 1985.03
- 古岡 英明
「越中国分寺の造営とその時代背景」 『北陸の古代寺院』 北陸古瓦研究会 桂書房
1987.02
- 古川 登
「越前明寺山廃寺の調査」(他) 『滋賀考古』15 1996.03
- 古田 清幹
『道鏡の生涯』 道鏡を守る会編 1992.04
- 古田 武彦
『法隆寺論争』市民の古代別巻4 (他) 新泉社 1993.05
- 北條 勝貴
「第一次行基集団の生成と構造上の特質」上,下 『日本古代・中世史 研究と資料』12.13
上智大学 1994.04 ~ 08
「第一次行基集団に対する弾圧の意味—主に關係法令の分析から—」 『紀尾井史学』14
上智大学 1994.12
- 北陸古瓦研究会
『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』 桂書房(富山) 1987.02
- 星野 五彦
「古代文学に於ける宗教と酒の関わりについて—仏教を中心として—」 『紀要』18 中
央学術研究所創立20周年記念号 1988
- 星野 聰
「法隆寺献納宝物の香木の刻銘と焼印について」 『国史研究』100 弘前大学 1996.03
- 星野 良史
「百済大寺の創立に関する一考察」 『大学院紀要』16 法政大学大学院 1986.03
「大安寺の熊凝草創説話について」 『法政史学』39 法政大学史学会 1987.03
「大化改新後の百済大寺」 『古代国家の歴史と伝承』 黛弘道編 吉川弘文館 1992.03
「道慈伝の成立と大安寺」 『日本古代の祭祀と仏教』 佐伯有清先生古稀記念会編 吉
川弘文館 1995.03
- 細川 行信
『聖徳太子の生涯』 法蔵館 1986.11
- 細野 順子
「興福寺蔵五部浄像の現状模刻について—脱活乾漆技法と古色彩色の試み—」 『文芸学
部紀要』39 共立女子大学 1993.02
「興福寺西金堂十大弟子・八部衆像の群像表現について」 『文芸学部紀要』40 共立女
子大学 1994.02
- 洞 富雄
「池後寺は法輪寺か法起寺か」 『日本歴史』494 1989.07
- 堀池 春峰
「石川年足と山田寺」 『奈良史学』5 奈良大学史学会 1987.12
「波羅門菩提僧正とその周辺」 『靈山寺と菩提僧正記念論集』 靈山寺 1988.05

「菩提僧正関係史料集」 『靈山寺と菩提僧正記念論集』 靈山寺 1988.05

本郷 真詔

「日本古代の王権と仏教」 『日本史研究』 295 1987.03

「光仁・桓武朝の国家と仏教—早良親王と大安寺・東大寺—」 『仏教史学研究』 34-1
1991.07

「古代王権と宗教」 『日本史研究』 368 1993.04

「国家仏教と行基」 『古代・中世の政治と文化』 上横手雅敬監修 思文閣出版 1994.04

「天平期の神仏関係と王権」 『日本古代国家の展開』 下 門脇禎二編 思文閣出版
1995.11

「古代北陸の宗教文化と交流」 『古代王権と交流3 越と古代の北陸』 小林昌二編
名著出版 1996.07

前沢 和之

「上野国分寺と「上野交替実録帳」」 『律令制社会の成立と展開』 亀田隆之先生還暦
記念会編 吉川弘文館 1989.12

「上野国分寺」 『考古学ジャーナル』 318 1990.05

「国分寺の造営」 『季刊考古学』 34 雄山閣出版 1991.02

「関東の古代寺院」 『関東』 新版古代の日本8 角川書店 1992.10

前園 実知雄

「大和における飛鳥・奈良時代の寺院の分布について」 『橿原考古学研究所論集』 9
吉川弘文館 1988.10

前田 清彦

「三河国分寺・国分尼寺の調査」 『日本歴史』 536 1993.01

「三河国分寺系軒丸瓦をめぐって—一成形台一本造り軒丸瓦の変遷とその系譜—」 『三河
考古』 8 三河考古学談話会 1995.05

前田 誠一郎

「唐招提寺用度帳」について 『研究紀要』 37 京都市立芸術大学 1993.03

前原 祥子

「金銅透彫灌頂幡にみる天衣」 『紀要』 24 武蔵野女子大学文化学会 1989.02

真壁町史編さん委員会

『真壁町史料』 考古資料編 3 古代寺院遺跡跡 真壁町(茨城) 1989.03

牧 伸行

「東大寺僧安寛と平栄」 『大学院紀要—旧大学院研究紀要』 22 仏教大学 1994.03

「東大寺と等定」 『紀要』 3 仏教大学総合研究所 1996.03

「義淵と僧綱」 『仏教史学研究』 40-2 1997.12

「良弁と『続日本紀』」 『政治と宗教—仏教大学総合研究所紀要別冊』 1998.03

牧野 英三

「東大寺二月堂声明—(継続発表として)実忠忌」 『紀要』 34-1 奈良教育大学 1985.11

正木 晃

「日韓の仏教受容とその展開 密教を中心として」 『古代史研究の課題と方法』 井上
辰雄編 国書刊行会 1989.10

増尾 聡哉

「『靈異記』の「罪」について—『梵網經古述記』を手掛かりに—」 『論輯』17 駒沢大学大学院国文学会 1989.02

「『日本靈異記』における『法華經』の位置について」 『駒沢国文』27 駒沢大学文学部国文学研究室 1990.02

増尾 伸一郎

「古写經の跋文と道教的思惟 坂上忌寸石楯供養經を中心に」 『古代史研究の課題と方法』 井上辰雄編 国書刊行会 1989.10

町田 甲一

「ことしは法隆寺草創(猪願)1380年」 『日本歴史』464 1987.01

「法隆寺金堂四天王像、およびその系列像について」 『東アジアと日本』 田村圓澄先生古稀記念会編 吉川弘文館 1987.12

松尾 剛次

「三戒壇について」 『都府楼』15 古都太宰府を守る会 1993.03

松尾 光

「『日本靈異記』の長屋王と行基」 『詰沫集』5 1987.03

松木 裕美

「薬師信仰の日本伝来について—比較文化史的視点から—」 『栃木史学』5 1991.03

「香山寺・新薬師寺の創立をめぐって」 『紀要』15 東京女学館短期大学 1993.03

「古代朝鮮における伝来期の薬師信仰—中国敦煌および日本と関連して—」 『私学研修』141 私学研修福祉会 1996.03

「川原寺の創立—その安置仏像と国家仏教—」 『日本古代の国家と祭儀』 林睦朗・鈴木靖民編 雄山閣出版 1996.07

松倉 文比古

「道場法師譚第一段について」 『仏教史学研究』33-2 1990.10

「『日本靈異記』中巻第8について」 『龍谷史壇』97 龍谷大学 1991.06

「良弁伝の一齣—良弁杉にまつわる説話について—」 『仏教文化研究所紀要』30 龍谷大学仏教文化研究所 1991.12

「蟹満寺縁起と狛(高麗)氏」 『龍谷史壇』99.100 龍谷大学 1992.11

松下 正司

「寺の多い国々—吉備地方—」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09

「中国・四国の古墳と寺院」 『考古学』60 1997.08

松田 和晃

「興福寺の資財帳について」 『史学』56-4 慶応義塾大学三田史学会 1987.02

「法隆寺僧善愷訴訟事件について」 『杏林社会科学研究』4-2 杏林大学社会科学学会 1987.12

「資財帳索引稿」1～3 『杏林社会科学研究』6-1～8-1 杏林大学社会科学学会 1989.09～91.09

「大安寺資財帳の成立に関する一考察」 『法学研究』64-1 慶応義塾大学法学研究会

1991.01

「水野柳太郎著『日本古代の寺院と史料』 『日本歴史』 549 1994.02

松田 誠一郎

「東京国立博物館保管十一面観音像(多武峰伝来)について」上・下 『国華』 1118 ~ 89
朝日新聞社 1988.11 ~ 12

「唐招提寺用度帳」について 『研究紀要』 37 京都市立芸術大学 1993.03

松田 猛

「地方定額寺についての一考察—『上野国交替実録帳』と古代寺院跡—」 『群馬県史研究』 32 1990.09

「上毛野における古代寺院の建立—山王廃寺創建期丸瓦の再検討—」 『信濃』 43-4

1991.04

松田 禎二

「日本の思想と文化—聖徳太子と飛鳥文化—」 『常葉学園浜松大学経営情報学部論集』 9-2
1996.12

松田 智弘

「玄寶の隠逸性について」 『国史学研究』 17 龍谷大学国史学研究会 1991.03

松永 博司

「古代禅師の性格に関する一考察」 『歴史研究』 38.39 大阪教育大学歴史学研究室
1992.11

松原 弘宣

「法隆寺と瀬戸内海交通」 『紀要』 26-1 愛媛大学 1993.12

松村 史郎

『平安初期彫刻の謎 天平の終焉と新時代の仏師たち』 河出書房新社 1988.12

松本 信道

「『延暦僧録』戒明伝の史料的特質」 『駒沢史学』 37 駒沢大学史学会 1987.11

「空有論争の日本的展開」 『文学部研究紀要』 49 駒沢大学 1991.03

「徳一の伝記的研究(1)承和9年入寂説批判」 『史聚』 26 駒沢大学史学会 1992.02

「大安寺三論学の特質—道慈・慶俊・戒明を中心として—」 『古代史論叢』 渡辺直彦
編 続群書類従完成会 1994.07

山田 磯夫

「群馬県邑楽郡大泉町出土観音菩薩立像」 『仏教芸術』 220 毎日新聞社 1995.5

「『靈異記』下巻十九縁の再検討—その史実と虚構—」 『文学部研究紀要』 53 駒沢大学
1995.03

黛 弘道

『聖徳太子事典』(他編) 新人物往来社 1991.04

丸山 顕徳

「『日本靈異記』道場法師説話と竜蛇信仰」 『立命館文学』 505 立命館大学人文学会
1988.03

「『日本靈異記』檜磐嶋説話の形成」 『研究論集』 22 四条畷学園女子短期大学 1988.12

「『日本靈異記』冥界説話の分類と特色」 『研究論集』 23 四条畷学園女子短期大学

1989.12

『日本靈異記』における隠身の聖とその説話 『研究論集』24 四條畷学園女子短期大学 1990.12

『日本靈異記』蟹報恩説話の性格 『研究論集』25 四條畷学園女子短期大学 1991.12

『靈異記』上巻第五話—仏像の古代的意義— 『神々の祭祀と伝承』 松前健教授古稀記念論文集 上田正昭編 同朋舎出版 1993.06

「景戒における唯識と菩薩」 『国文学論究』22 花園大学 1994.12

『日本靈異記』におけるオーラル・コンポジション：上巻第5縁を通して 『国文学論究』23 花園大学 1995.12

御子柴 大介

「光明子の仏教信仰 その仏教的環境と国分寺・国分尼寺創建への関与について」 『尼と尼寺』 平凡社 1989.08

「天武朝の仏教政策」 『女子短期大学部紀要』8-1 城西大学女子短期大学部 1991.01

「行基の民間布教について」 『寺院史研究』2 寺院史研究会 1991.10

「国家仏教論小考」 『城西文学』20 城西大学 1995.03

三崎 裕子

「奈良時代における禅院の機能と性格」 『史論』44 東京女子大学学会史学研究室 1991.03

『靈異記』にみえる病と看病 『日本靈異記の原像』 平野邦雄編 角川書店 1991.07

三島市教育委員会

『伊豆国分寺関連遺跡』1 三島市教育委員会(静岡) 1990.03

水谷 千秋

「僧旻と蘇我氏」 『仏教史学研究』36-2 1993.10

水野 柳太郎

「日本書紀と元興寺縁起」 『東アジアと日本 歴史編』 田村圓澄先生古稀記念会編 吉川弘文館 1987.12

「日本靈異記上巻第5話と日本書紀」 『奈良史学』9 奈良大学史学会 1991.12

『日本古代の寺院と史料』 吉川弘文館 1993.02

「行基の大仏勧進記事をめぐって—『続日本紀』卷十五天平十五年十月乙酉条—」 『続日本紀研究』300 1996.03

水野 正好

『古代を考える 河内飛鳥』(他編) 吉川弘文館 1989.10

御獄 貞義

「越前明寺山麿寺の調査」(他) 『滋賀考古』15 1996.03

三橋 正

「古代における神祇と仏教」 『宗教研究』65-4 1992.02

「シンポジウム・神仏習合と神仏隔離をめぐって」(他) 『神道宗教』146 1992.03

光森 正士

「古代寺院の礼拝空間についての試論—三金堂、二金堂の存在に対する疑問」 『龍谷史壇』93.94 龍谷大学 1989.03

- 「正倉院宝物の仏像型と押出仏」 『仏教芸術』 200 1992.02
湊 敏郎
- 「『僧綱補任』巻第二の校訂」 『続日本紀研究』 303 1996.08
峰 陽子
- 「中河内地方の仏教文化とその背景」(他) 『古代史の研究』 10 関西大学古代史研究会 1995.06
箕輪 成男
- 「飛鳥奈良時代における写経生産の経済—日本出版経済前史—」 『国際経営論集』 5
神奈川大学経営学部出版委員会 1993.05
- 三舟 隆之
- 「靈龜2年の寺院併合令について」 『紀要』 24-4 明治大学大学院 1987.02
- 「国分寺造営と地方豪族—国分寺系軒瓦の分布を中心として—」 『駿台史学』 75 明治大学駿台史学会 1989.01
- 「八世紀前半の地方仏教—「金井沢碑分」を中心として—」 『律令国家の展開過程』
瀧音能之編 名著出版 1991.03
- 「郡衙と寺院—「郡寺」について—」 『古代国家の歴史と伝承』 黛弘道編 吉川弘文館 1992.03
- 「上淀麿寺と山陰の古代寺院」 『古代王権と交流 7 出雲世界と古代の山陰』 瀧音能之編 名著出版 1995.02
- 宮 次男
- 「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」 上・中 『美術研究』 333.335 1985.09～86.03
- 宮城 洋一郎
- 「行基の諸施設と救済事業をめぐって」 『日本仏教史論叢』 二葉憲香博士古稀記念論文集刊行会編 永田文昌堂 1986.10
- 「東大寺の大仏造立と八幡神について」 『日本仏教学会年報』 52 1987.03
- 「光明皇后の悲田院・施薬院をめぐって」 『援助的人間関係』 永田文昌堂 1988.06
- 「仏教救済事業の史的分析について」 『日本の宗教と文化』 平松令三古稀記念会編 同朋舎出版 1989.11
- 『日本仏教救済事業史研究』 永田文昌堂 1993
- 「『行基年譜』の成立について」 『印度学仏教学研究』 43-1 1994.12
- 宮崎 健司
- 「奈良初期の遷俗について」 『仏教史学研究』 32-2 1989.10
- 「天平宝字2年の写経 慈訓と慶俊をめぐって」 『日本史における社会と宗教』 堅田修編 文栄堂書店 1991.02
- 「藤原仲麻呂政権と仏教」 『大谷大学史学論究』 4 1991.03
- 「光明皇后発願五月一日経の勘経について」 『尋源』 41.42 大谷大学 1992.01
- 「法華寺の三「鳴」院について」 『大谷学報』 71-4 大谷大学 1992.08
- 「年料多心経について」 『仏教史学研究』 35-2 1992.11
- 「藤原仲麻呂と般若心経」 『史聚』 28 駒沢大学史学会 1993.11
- 「天平勝宝七歳における『大宝積経』の勘経」 『正倉院文書研究』 2 1994.11

- 「光明故七七日写経をめぐる1、2の問題」 『大谷学報』75-4 大谷大学 1996.03
- 「奈良末・平安初期における疫神祭祀」 『日本古代の社会と宗教』 日野昭編著 仏教文化研究叢書6 永田文昌堂 1997
- 宮崎 糺
「武蔵国分寺文字瓦と漆紙文書の発見について」 『多摩考古』20 1990.05
- 宮崎 雅弘
「僧尼名籍小考」 『古代国家の歴史と伝承』 黛弘道編 吉川弘文館 1992.03
- 宮崎県教育庁文化課
『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書』2 宮崎県教育委員会 1990.03
- 宮瀧 交二
「古代村落と墨書土器—千葉県八千代市村上遺跡の検討—」 『史苑』44-2 立教大学史学会 1985.06
- 「「山野路辺」における「百姓」の「造塔」について—『続日本紀』天平十九年十二月十四日条の一考察—」 『古代史研究』13 立教大学古代史研究会 1995.05
- 武蔵国分寺遺跡調査団
『武蔵国分寺跡発掘調査報告』8.9 武蔵国分寺遺跡調査会(東京) 1985.02
- 武蔵国分寺関連遺跡調査会
『武蔵国分寺関連遺跡の調査』1～3 武蔵国分寺関連遺跡調査会 1990.03～92.05
- 村上 和夫
「信濃善光寺創建に関する一研究—出土瓦の造瓦技法・瓦当文様から—」1.2 『千曲』56.57 1988.01～05
- 村川 行弘
「行基絵伝にみられる「猪名寺狐独園地図」について」 『総合科学の諸問題』 故金沢尚淑博士追悼論文集編纂委員会編 大阪経法大出版部 1987.10
- 「河内の古代寺院址と氏族—旧高安郡を中心に—」 『総合科学研究所年報』11 大阪経済法科大学総合科学研究所 1992.03
- 村越 信子
「天平時代の塑像についての一考察」 『研究紀要—人文社会科学』34 東京家政大学 1994.02
- 村田 靖子
「止利式仏像の服制についての一考察」 『美術史』131 1992.02
- 村田 文夫
「影向寺の創建と史的展開に関する素描 南武蔵の一古代寺院をめぐる調査研究の現状」 『三浦古文化』49 1991.07
- 毛利 光俊彦
「古代の都城と寺院」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1991.09
- 茂木 秀淳
「『靈異記』にみられる優婆塞」 『教育学部紀要』71 信州大学 1990.12
- 「古代日本の冥界説話」 『宗教研究』64-4 1991.02
- 「『冥界説話』の世界観」 『教育学部紀要』72 信州大学 1991.03

- 「『靈異記』にみられる沙弥」 『教育学部紀要』80 信州大学 1993.12
- 「靈驗譚の一考察—『靈異記』から『今昔』へ—」 『宗教研究』69-4 1996.03
- 望月 一樹
- 「南武蔵における古代寺院の造営—川崎・影向寺を事例として—」 『郷土神奈川』20
神奈川県立文化資料館 1987.03
- 森 明彦
- 「行基と高石の仏教」 『高石市史』1 高石市 1989.03
- 『行基年譜』に関する二つの問題」 『日本文化史論集』 有坂隆道先生古稀記念会編
同朋舎出版 1991.03
- 「千部法花経充本帳の断簡整理」 『紀要』2 関西女子短期大学 1992.12
- 森 章
- 「長岳寺の奈良時代層塔の笠石と竹野王塔」 『史迹と美術』64-4 1994.05
- 森 郁夫
- 「わが国古代における造営技術僧」 『学叢』11 京都国立博物館 1989.03
- 「瓦の見方」 『季刊考古学』34 雄山閣出版 1991.02
- 「わが国古代寺院の伽藍配置」 『学叢』13 京都国立博物館 1991.03
- 『瓦と古代寺院』 六興出版 1991.05
- 「変化していく伽藍配置」 『古代の寺を考える』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所
1991.09
- 「古代寺院伽藍配置の分析」 『考古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状』6
帝塚山大学 1993.03
- 「古代尾張における寺院造営—七世紀後半を中心として—」 『論苑考古学』 坪井清足
さんの古稀を祝う会編 天山舎 1993.04
- 「わが国における初期寺院の成立」 『学叢』16 京都国立博物館 1994.03
- 「官寺川原寺」 『教養学部紀要』42 帝塚山大学 1995.08
- 「法隆寺伽藍配置の成立」 『教養学部紀要』43 帝塚山大学 1995.10
- 「古代資料の型式学と編年論」 『考古学雑誌』82-3 1997.01
- 森井 昭顕
- 「仏教の伝来と密教」 『研究論集』12-3 広島経済大学経済学会 1989.12
- 森下 衛
- 「広隆寺出土瓦について—昭和56年度調査の瓦溜り(SK13下層)出土資料を中心に—」
『京都府埋蔵文化財論集』1 1987.01
- 森下 和貴子
- 「藤原寺考—律師道慈をめぐって—」 『美術史研究』25 早稲田大学美術史学会 1987.12
- 森田 悌
- 「行基の宗教運動」 『教育学部紀要—人文科学・社会科学編』39 金沢大学 1990.03
- 「紫香楽と良弁」 『続日本紀研究』280 1992.06
- 「古代在地仏教の一考察」 『政治経済史学』323 1993.05
- 「徳一とその仏教」 『日本古代の人と文化』 下出積與編 高科書店 1993.08
- 『渡来人と仏教信仰—武蔵国寺内廃寺をめぐって』(他編) 雄山閣出版 1994.06

- 「武蔵国における仏教信仰の展開」 『渡来人と仏教信仰』 柳田敏司・森田悌編 雄山閣出版 1994.06
- 「花寺と壬生吉志」 『渡来人と仏教信仰』 柳田敏司・森田悌編 雄山閣出版 1994.06
- 「武蔵国寺内廃寺をめぐる」 『渡来人と仏教信仰』 柳田敏司・森田悌編 雄山閣出版 1994.06
- 「天平宝字八年「造東大寺司牒」の故京職宅」 『日本歴史』 568 1995.09
- 森田 喜久男
「古代王権の山野河海支配と禁処」 『歴史学研究』 677 1995.10
- 森本 晋
「百万塔の計量分析」 『考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状』 帝塚山大学帝塚山考古学研究所 1988.03
- 守屋 俊彦
「靈異記と民間伝承」 『靈異記 氏文 縁起』 古代文学講座 11 勉誠社 1995.06
- 八重樫 直比古
「空と勝義の孝—古代仏教における怨霊救済の論理—」 『日本精神史』 石田一良編 ペリかん社 1988.03
- 「宣命と仏教—『続日本紀』神護景雲三年十月乙未朔条の一考察—」 『日本思想史学』 20 1988.09
- 「慧沼『金光明最勝王経疏』における「王法正論品」解釈」 『紀要—文化学編』 12-1 ノートルダム清心女子大学 1988.03
- 「『日本靈異記』上巻第5話小考(研究ノート)」 『古典研究』 15 ノートルダム清心女子大学 1988.03
- 「研究資料：『日本靈異記』下巻第13話の類話および再録説話対照表」 『古典研究』 17 ノートルダム清心女子大学 1990.07
- 「『日本靈異記』における聖武天皇」 『日本思想史学』 23 1991.09
- 「慧沼『金光明最勝王経疏』 「王法正論品」注釈・経文対照表」 『紀要—文化学編』 18 ノートルダム清心女子大学 1994.03
- 『古代の仏教と天皇—日本靈異記論』 翰林書房 1994.10
- 「鑑真と道士と遣唐使—『唐大和上東征伝』をめぐる覚書」 『日本の仏教』 3 法蔵館 1995.07
- 八木 毅
「校合日本靈異記下巻(其の6)」 『文学部紀要—国語・国文学』 21 梅花女子大学 1986.12
- 「日本靈異記の成立と構想」 『靈異記 氏文 縁起』 古代文学講座 11 勉誠社 1995.06
- 安井 良三
「古代寺院建立の精神」 『日本精神史』 石田一良編 ペリかん社 1988.03
- 柳田 敏司
「武蔵国寺内廃寺をめぐる」 『渡来人と仏教信仰』 柳田敏司・森田悌編 雄山閣出版 1994.06
- 矢作 武

『日本靈異記』と陽明文庫本『孝子伝』—朱明・帝舜・三州義士— 『相模国文』 14
相模女子大学国文研究会 1987.03

『大安寺碑文』小考 『古代研究』 22 早稲田大学早稲田古代研究会 1990.01

『日本靈異記』の「行基説話」と中国の「鬼索債譚」—中巻第 30 話を中心に— 『相模国文』 17 相模女子大学国文研究会 1990.03

藪 敏晴

『日本国現報善悪靈異記』冒頭 3 話考—水を掌るもの— 『国学院雑誌』 92-2 国学院大学 1991.02

「不忍文庫本『日本靈異記』に関する基礎的考察」 『図書館紀要』 6 国学院大学 1994.03

藪中 五百樹

「奈良時代に於ける興福寺の造営と瓦」 『南都仏教』 64 1990.06

山尾 幸久

「日本への仏教伝来の学説をめぐって」 『立命館文学』 511 立命館大学人文学会 1989.06

山岸 常人

「発掘寺院の建築」 『季刊考古学』 34 雄山閣出版 1991.02

「如意寺伽藍の形成とその性格」 『古代文化』 43-6 1991.06

「仏堂納置文書考」 『研究報告』 40 国立歴史民俗博物館 1992.12

山口 敦史

「日本靈異記と密教世界」 『日本文学研究』 28 大東文化大学日本文学会 1989.02

「日本靈異記の「自度」について—〈私度僧の文学〉を考える—」 『日本文学論集』 16
大東文化大学大学院日本文学専攻 1992.03

山口 英男

『額田寺伽藍並条里図』の復原をめぐって 『条里制研究』 9 1993.12

「大和額田寺伽藍並条里図」 『日本古代荘園図』 金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編 東京大学出版会 1996.02

山路 直充

「下野薬師寺跡の伽藍(試論)」 『古代』 89 早稲田大学考古学会 1990.03

「下総国分寺跡採集といわれる二点の字瓦」 『千葉史学』 17 1990.11

「下総国分寺創建期燈瓦の製作技法と千葉寺廃寺の事例」 『千葉県の歴史』 45 1993.12

山下 哲郎

『日本靈異記』における贊 『日本文学』 14 明治大学日本文学研究会 1986.08

山下 守昭

「奈良時代寺院成立の一端について—相模国高座郡下寺尾廃寺の古瓦について」(他)
『神奈川考古』 27 1991.05

山下 有美

「正倉院文書を伝えた写経機構」上,下 『正倉院文書研究』 2.3 1994.11 ~ 95.11

「勅旨写一切経所について—皇后宮職系統写経機構の性格—」 『正倉院文書研究』 4
1996.11

山下 隆次

「奈良県香芝市尼寺廃寺塔跡の調査」 『考古学ジャーナル』 414 1997.03

山城町教育委員会

『史跡高麗寺跡第2次範囲確認調査概報』 山城町教育委員会(京都) 1986.03

山中 敏史

「官衙・寺院と地方支配」 『新版古代の日本』4 中国・四国 角川書店 1992.01

山梨県埋蔵文化財センター

『山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書』 1995.03

山本 謙治

「金峯山飛来伝承と五台山信仰」 『文化史学』42 同志社大学文化史学会 1986.11

「古代透彫り文様にみる龍モチーフの造形」 『文化史学』45 同志社大学文化史学会
1989.11

「法隆寺金堂釈迦三尊像の光背をめぐって」 『文化史学』46 同志社大学文化史学会
1990.11

「法隆寺金堂釈迦三尊像両脇侍光背の比較検討」 『博物館学年報』22 同志社大学
1990.12

「当麻寺金堂弥勒如来坐像について—毛利久説の再検討と朝鮮軍威石窟像および龍門石窟葉方洞像との造形比較—」 『博物館学年報』27 同志社大学 1995.12

山本 忠尚

「若草伽藍非焼失論」 『論苑 考古学』 坪井清足さんの古稀を祝う会編 天山舎
1993.04

山本 哲也

「土佐国分寺跡の再検討」 『海南史学』32 1994.08

山本 肇

「佐渡国分寺跡周辺の地割について」 『新潟考古学談話会会報』9 1992.05

山本 靖

「埼玉県広木上宿遺跡出土の小型宝塔と小型未開敷蓮華」 『考古学雑誌』81-3 1996.03

山本 幸男

「天平宝字2年造東大寺司写経所の財政運用—知識経写経と写経司別当の錢運用を中心に」 『南都仏教』56 1986.08

「天平宝字四～五年における一切経の書写—関係史料の整理と全体像の検討—」 上.下
『南都仏教』59.60 1988.03～12

「光明皇太后崩後の藤原仲麻呂政権—周忌齋一切経書写事業の検討を通して—」 『古代史論集』中 直木孝次郎先生古稀記念会編 塙書房 1988.08

「天平宝字二年における御願経・知識経書写関係史料の整理と検討」 上.下 『正倉院文書研究』1.2 1993.11～94.11

「孝謙天皇と大郡宮—聖武天皇の出家をめぐる憶測—」 『続日本紀の時代』 塙書房
1994.12

「天平宝字年間における経師・装甯・校生の動向—一覧表の提示—」 『研究論集』11
相愛大学 1995.03

「天平宝字二年における御願経三六〇〇巻の書写」 上.下 『正倉院文書研究』3.4 1995.11
～96.11

山本 義孝

「二上山麓の石窟寺院—鹿谷寺・岩屋の資料化と背景—」 『史学論叢』23 別府大学史学研究会 1993.02

湯浅 泰雄

『日本古代の精神世界 歴史心理学的研究の挑戦』 名著刊行会 1990.10

『古代人の精神世界』 ミネルヴァ書房 1996.07

湯浅 幸孫

「僧尼令考釈—養老令と唐制—」 『研究紀要』72 仏教大学学会 1988.03

義江 彰夫

「日本における神仏習合形成の社会史的考察」 『中国—社会と文化』7 東京大学中国学会 1992.06

吉岡 哲

「生駒山地南端西麓の古代寺院—河内6寺と竹原井頓宮・智識寺南行宮をめぐって—」

『末永先生米寿記念献呈論文集』坤 末永先生米寿記念会編 奈良明新社 1985.06

吉岡 康暢

「北陸道の古代寺院」 『北陸の古代寺院』 北陸古瓦研究会編 桂書房 1987.02

吉川 真司

「東大寺山堺四至図」 『日本古代荘園図』 金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編 東京大学出版会 1996.02

吉田 一彦

「竜女の成仏」 『救いと教え』 大隅和雄・西口順子編 平凡社 1989.04

「僧尼と古代人」 『寺院史研究』2 寺院史研究会 1991.10

「律令仏教論批判」 『日本の仏教』1 法蔵館 1994.10

『日本古代社会と仏教』 吉川弘文館 1995.11

「多度神宮寺と神仏習合—中国の神仏習合思想の受容をめぐって—」 『古代王権と交流4 伊勢湾と古代の東海』 梅村喬編 名著出版 1996.11

吉田 清

「智識優婆塞貢進について」上 『花園史学』13 花園大学 1992.11

「行基と優婆塞」 『花園史学』16 花園大学 1995.11

吉田 實盛

「東大寺修二会と天台の礼懺」 『天台学報』29 天台学会 1987.10

吉田 典代

「ボストン美術館本法相曼荼羅成立の意図」 『国華』1212 1996.11

吉田 寛

「大分県中津市相原廃寺採集の古瓦—豊前における古代寺院の成立年代をめぐって—」

『九州考古学』63 1989.06

吉田 靖雄

「法相宗の伝来と道昭・行基の関係」 『古代史論集』上 直木孝次郎先生古稀記念会編 塙書房 1988.01

「東大寺天地院の創立と行基」 『日本仏教史学』24 1990.02

- 「奈良時代の得度と受戒の年齢について」 『続日本紀の時代』 塙書房 1994.12
- 由谷 裕哉
「古代東アジアにおける宗教文化の交流の一側面：7～9世紀頃の道教・新羅仏教と白山との関係を中心として」 『論集』6 小松短期大学 1994.03
- 吉津 宜英
「南都六宗の宗名について」 『宗教研究』68-4 1995.03
- 吉村 怜
「飛鳥様式南朝起源論」 『東アジアと日本』 田村圓澄先生古稀記念会編 吉川弘文館 1987.12
- 「百濟仏教伝来考」 『社会科学討究』35-2 早稲田大学社会科学研究所 1989.12
- 「日本初期仏教像における梁・百濟様式の影響」 『仏教芸術』201 1992.04
- 「止利式仏像と南朝様式の関係—岡田健氏の批判に答えて—」 『仏教芸術』219 1995.03
- 「飛鳥白鳳彫刻史試論—時代—様式理論への疑問—」 『仏教芸術』227 1996.07
- 吉本 堯俊
「古彫瞥見(1) 伝玄昉墓塔(資料紹介)」 『紀要』5 筑紫女学園大学 1993.01
- 淀江町教育委員会
『上淀廃寺と彩色壁画—日本最古の仏教壁画と白鳳寺院 概報』 吉川弘文館 1992.06
- 米田 雄介
「興福寺南円堂の建立と藤原内麻呂」 『続日本紀研究』281 1992.08
- 米山 孝子
『『日本靈異記』における行基の神通力説話—その教理的・説話的遡源を考える—』 『国語国文』17.18.19 高野山大学 1992.12
- 『行基説話の生成と展開』 勉誠社 1996.06
- 李 乾熙
「日本仏教伝来について」 『印度学仏教学研究』42-1 印度学仏教学会 1993.12
- 若井 敏明
「再び造東大寺司の成立について」 『続日本紀研究』250 1987.05
- 「三たび造東大寺司の成立について 市原王をめぐる」 『続日本紀研究』263 1989.06
- 「僧尼令准格律条をめぐる一臆説」 『古代史の研究』8 関西大学古代史研究会 1990.07
- 「国分寺発願考」 『続日本紀研究』270 1990.08
- 「律令国家の僧俗関係について」 『ヒストリア』135 1992.06
- 「7.8世紀における宮廷と寺院」 『ヒストリア』137 1992.11
- 「法隆寺と古代寺院政策」 『続日本紀研究』288 1994.01
- 「摂河泉における僧尼の動向—行基を中心に—」 『大阪の歴史と文化』 井上薫編 和泉書院 1994.03
- 「大仏造立をめぐる覚書」 『続日本紀の時代』 塙書房 1994.12
- 若木 寛
「天平の東大寺大仏殿」 『南都仏教』58 1987.06
- 脇本 平也
『『日本靈異記』の靈魂観』 『中央学術研究所紀要』24 1995.12

渡辺 晃宏

「金光明寺写経所と反故文書」 『国史研究』 81 弘前大学国史研究会 1986.10

「造東大寺司の誕生—その前身機構の考察を中心に—」 『続日本紀研究』 248 1987.01

「金光明寺写経所の研究 写経機構の変遷を中心に」 『史学雑誌』 96-8 1987.08

「続造東大寺司の誕生 造物所・造仏司管見補遺」 『続日本紀研究』 255 1988.01

渡辺 宏治

「薬師経受容についての一考察—赦記事との関連を中心に—」 『人文論究』 39-3 関西
学院大学人文学会 1989.12

奈良仏教の地方的展開の研究
(課題番号11610336)

平成13年3月21日

研究代表者 根本誠二 (筑波大学歴史・人類学系助教授)

発行所 筑波大学歴史・人類学系 根本研究室
〒305-8571
茨城県つくば市天王台1-1-1
